

第3期高島市まちづくり推進会議

成果報告書

2019年度～2020年度



目 次

ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

テーマ「市内のバス交通のあり方」
バス交通グループ報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

テーマ「地域とのつながりを生み出すための地域行事」
地域行事グループ報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

まちづくり座談会「高島で暮らす、まちをつくる」
第3期高島市まちづくり推進会議をふりかえって・・・・ 27

2年間をふりかえって・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

高島市まちづくり推進会議について・・・・・・・・・・ 38

会議の記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39

第3期高島市まちづくり推進会議 参加者・関係者一覧・・・・ 41





日頃は、高島市まちづくり推進会議の運営にご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

今回、14人の委員がテーマ別に分かれて市職員さんや研究者の方々と共に「市内のバス交通のあり方」「地域とのつながりを生み出すための地域行事」について考えました。『協働』という言葉はよく使われるようになりましたが、まだまだ馴染みが薄く、何をすれば良いのかが分からず、難しそうなイメージがあるかもしれませんが、全く新しい事を始めるということではなく、私たちが普段から当たり前に行っている町内会や集落行事への参加、ボランティア活動、自主防災組織での活動、お祭りや各種地域活動などの延長線上にあるもので、市民と行政が共に手を携え、魅力あるまちづくりを推進するためのものだと思います。

この二つのテーマ以外にも、高島市が抱える問題は山積みです。

少子高齢化、人口減少、財政の健全化などの問題を市民の皆さんがどれだけ知り、問題意識や興味を持つかが最初の一步だと思います。

第3期高島市まちづくり推進会議

委員長 木津 陽介



新型コロナウイルス感染症につきましては、昨年11月以降、第3の波として全国的に急激に拡大したこともあり、これまでに罹患された方々に対しまして謹んでお見舞い申し上げます。

こうした中、国内におきましては医療従事者への新型コロナワクチンの接種が始まったところであり、市としましても、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防止し、市民の健康を守るとともに地域の社会経済活動との両立を図るため、高齢者からの優先接種をはじめ、市民への円滑なワクチン接種に努めてまいりたいと考えているところであります。

このようなコロナ禍の中で、第3期（令和元年度～令和2年度）の委員の皆さまには、第2期の委員の皆さまが作成された“市民が考える将来の高島市”「高島市の将来像（2040年）」の実現を目指し、2つのグループに分かれ活動を行っていただきました。人の移動や対面での接触が制限され、現状調査が実施できないなど満足のいく活動ではなかったものの、創意工夫されながら、議論や検討を重ねていただき、今般、市民と行政にそれぞれに向けたご提案をいただいたところであり、引き続き、市民の皆さま、事業者、行政など多様な主体が協働し、住みよい地域社会の創出に向けた市民協働によるまちづくりの推進に取り組んでまいります。

最後になりましたが、委員の皆さまをはじめ、滋賀県琵琶湖環境科学研究センターや他府県の大学、研究機関に所属されているコーディネーターの皆さまには、2年間にわたり大変お世話になりありがとうございました。心からお礼申し上げます。

高島市長 福井正明

市内のバス交通のあり方グループ



市内のバス交通のあり方グループ

1. 見える福祉

高島市内の公共交通としてのバスの経営状況は、大変厳しく、令和元年度の「路線バス」「コミュニティバス」「乗合タクシー」「市営バス」を合わせた公共交通の収支は、3億700万円の赤字となっています（「広報たかしま」2020年11月号より）。

このような赤字を抱えるバス交通の現状と課題を図1のように整理しました。高島市のバス交通の赤字を生み出す構造は、人口減少や高度成長期以降のモータリゼーションによる自家用乗用車の普及により、利用者数が大幅に減少していることが原因の一つであると考えられます。

しかし、児童、生徒や高齢者など車を所有しない人々の通学や通院、買い物などにおいては、欠かすことのできない交通手段です。

高島市のバス交通の考え方として、「市内の全集落（概ね大字単位）に最低1か所の停留所を設置し、バスもしくは乗り合いタクシーを運行します」という方針が示されています（「広報たかしま」2020年11月号より）。このような市の考え方は、収入を最大化しようとする営利的な目的というよりは、人々の日常の移動手段の提供という、公共の福祉の側面がより重要視されています。

市内を走る、乗客の少ないバスを見かけると、なぜ空気ばかりを運ぶバスがこれまで走り続けてきたのだろうか、疑問に思いかもしませんが、現在のバスはその走る姿自体が見える福祉であり、市内の公共的な移動を支える手段が市民に提供されていることを示しているのです。

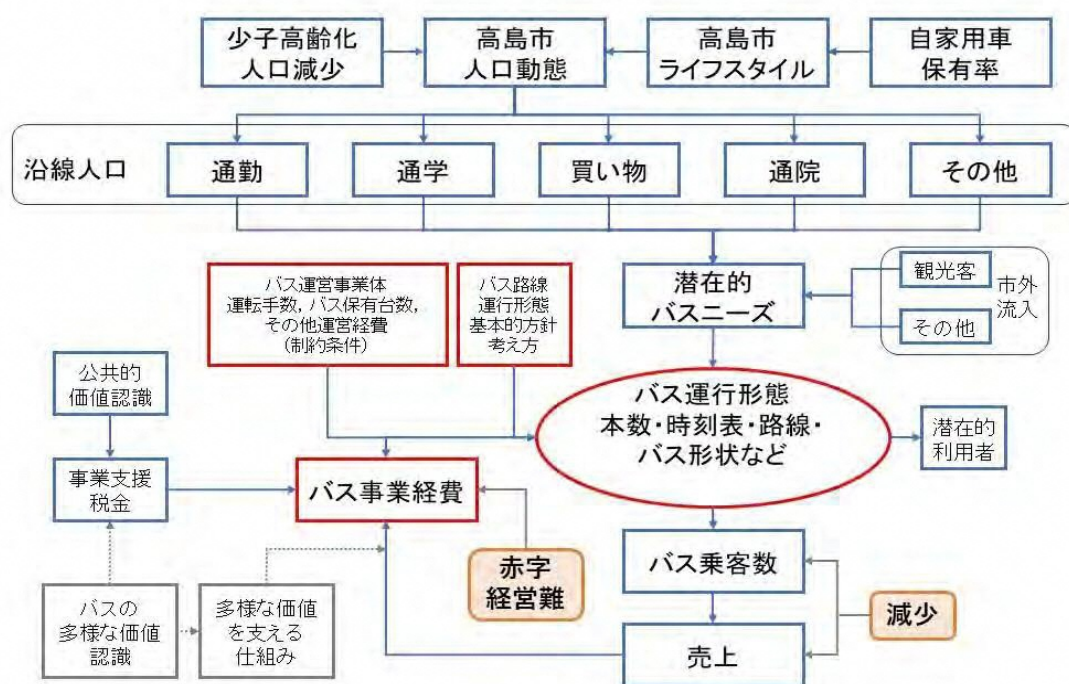


図1 高島市のバス交通の現状と抱える問題構造

市内のバス交通のあり方グループ

高島市は、このようなバス交通の現状を広報誌や様々な手段を通じた情報発信を行なっていますが、バスの利用状況を鑑みると、市民においてバス交通に関心を持ち、今後の方向性について現状を把握した上で意見を表明することができる人は、少ないのではないのでしょうか。

2. 高度成長期と共に生きたバス交通

日本全体のバス事業は、1950 年から 1960 年代にかけて高度成長期に進んだ都市化による通勤需要などに合わせて急激に乗客数が増加しましたが、1960 年代後半から自家用自動車の普及により、乗客数が減少し始め、現在では地域によっては路線の廃止が進むなど、事業存続に向けた検討が各地で進められています。

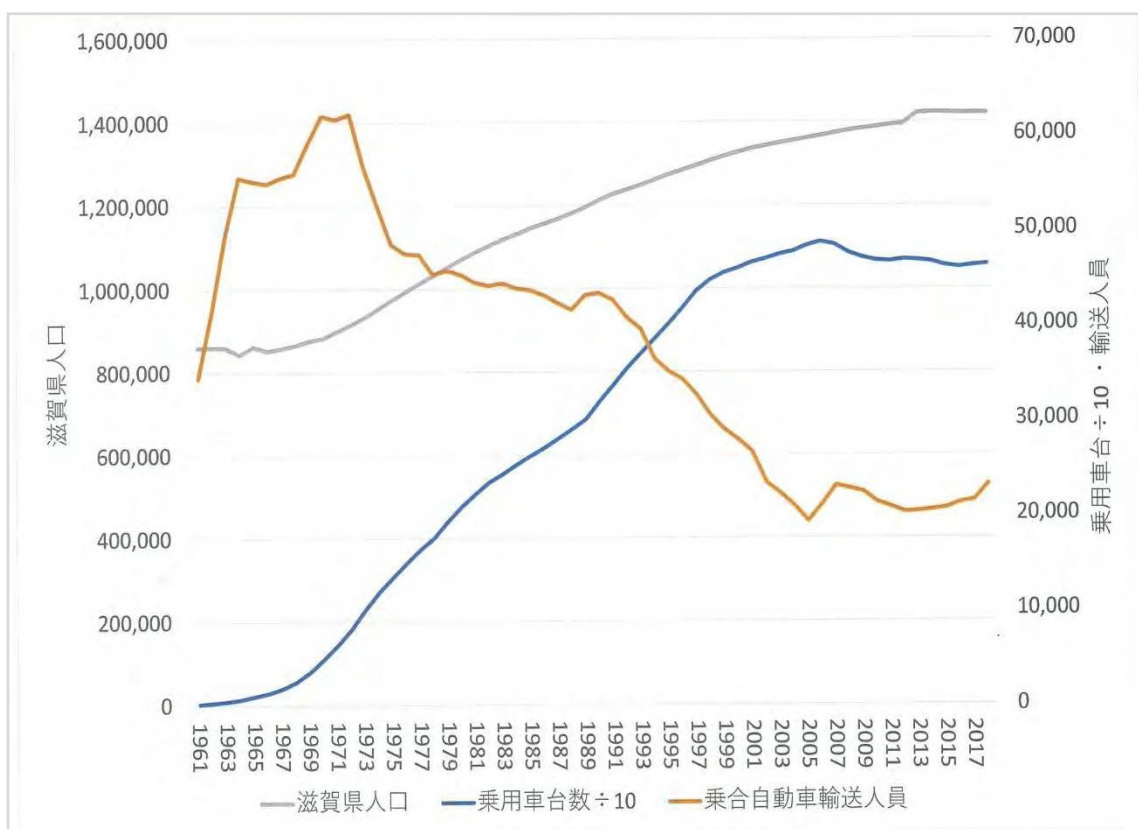


図2 滋賀県の総人口と乗用車台数、乗合自動車（バス）乗客数の変遷

滋賀県の状況は、図2に示すように、1970年ごろから自家用乗用車の普及が進み、1972年をピークにバスの乗客数が減少に転じています。1980年代以降から2000年代初頭にかけて自家用乗用車の台数は増加し続け、それに伴いバス乗客数は減少の一途をたどっていきました。自家用乗用車の台数は、2006年ごろをピークに徐々に減少傾向に転じていますが、併せてバス乗客数も減少傾向から横ばい傾向へと転じています。

このようなことから、滋賀県においては、高度成長期に道路などのインフラ整備が進み、第1次産業から第2次産業、第3次産業への移行に伴い通勤者が増えるなど、ライフスタイルの変化なども相まって、バスの乗客数は増加したものの、1970年代以降の自家用乗用車の普及に伴い、乗客数が減少したものと考えられます。

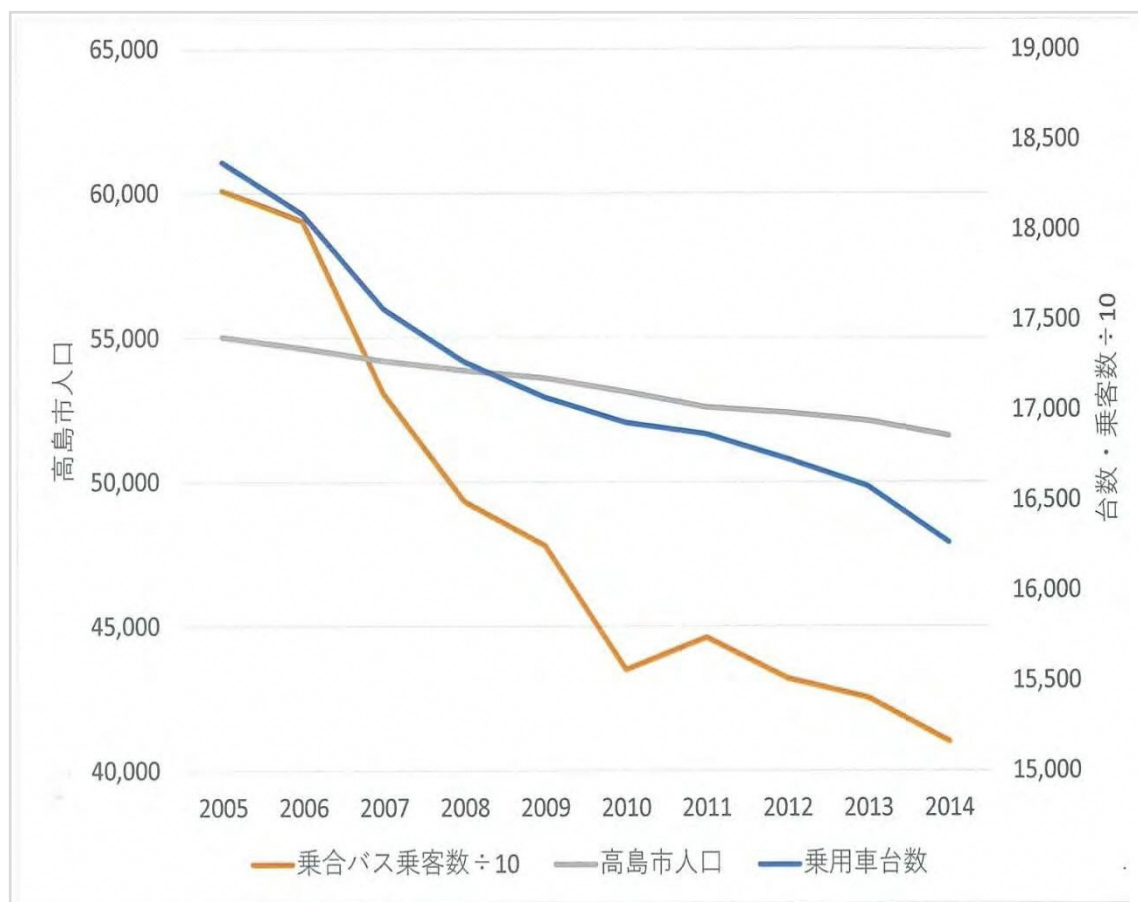


図3 高島市の総人口と乗用車台数、乗合自動車（バス）乗客数の変遷

滋賀県全体では、2019年まで人口は増加傾向にありましたが、高島市においては、図3の灰色の線のように、2005年の合併時から人口は減少傾向にあります。併せて乗用車台数も減少傾向にありますが、滋賀県全体の傾向とは異なり、バス乗客数の減少に歯止めがかかってはいません。

3. 高島地域の成長を期待したバス交通への投資

前章の図3の通り、高島市の人口は減少傾向にあります。国立社会保障・人口問題研究所のデータによると、高島市の人口は2030年には現在の47,508人から約5,000人減って41,720人に、2040年には現在からおよそ10,000人減って35,646人になると推計されています。また総人口に占める65歳以上の人の割合を表す高齢化率は、2030年に40%超、2040年には約45%になると言われています。

人口が減少し高齢化が進む社会において、バス交通をどのように考えていくべきでしょうか。このことを考えるために、私たちは、まず高島市におけるバス交通がどのように成立していったのかを整理しました。

旧六町村の町史・村史を参照すると、今の高島市域のバス交通は、1923年に今津から大津市の間を湖岸に沿って走る路線が開通されたのが端緒であると考えられます。それと同時期に、今津と、当時汽船の棧橋があった大溝を結ぶ路線も開通しています。その後、1930年頃にかけて、高島、安曇川、新旭、今津、マキノの地域内や、大津・京都・若狭に向けて、宮田自動車、湖西自動車株式会社、そして江若鉄道の各社によって路線が作られました。

各地域の町史や村史によると、バス会社は地域の足として地元の有志たちが立ち上げたと伝えられています。一方で、必ずしも順風満

市内のバス交通のあり方グループ

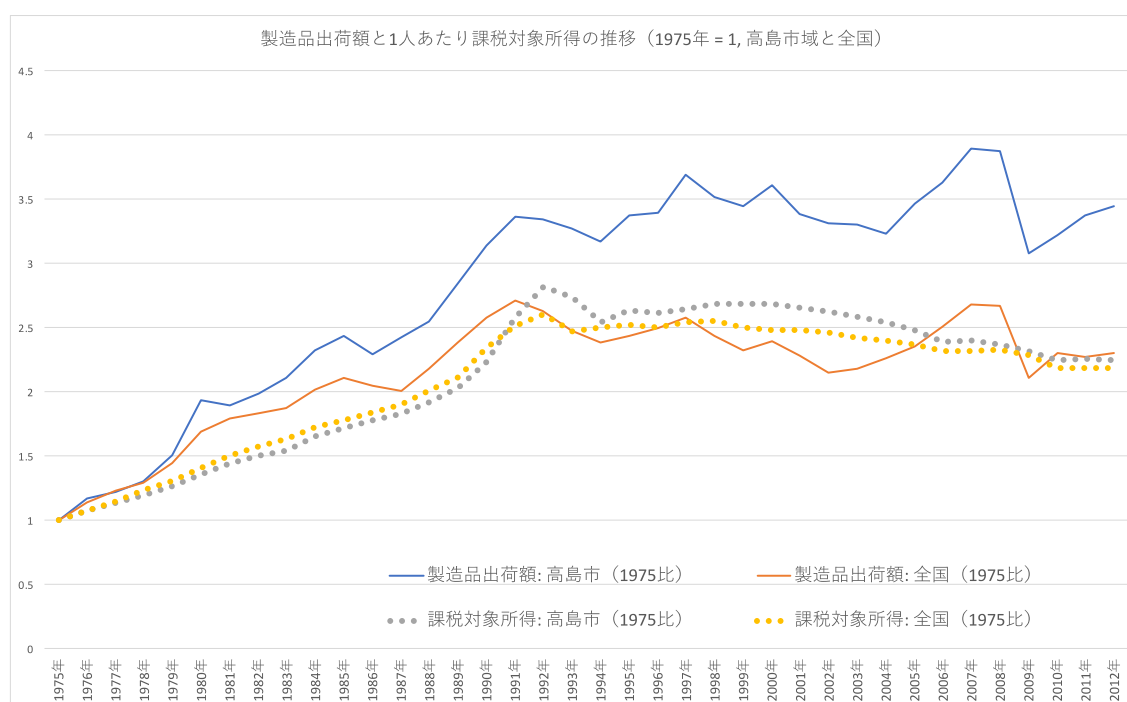


図4 製造品出荷額と課税対象所得にみる、高島市と全国の経済成長の比較

帆な事業ではなかったようで、1931年にはバス運行を担っていた湖西自動車株式会社が消滅しています。高島の黎明期のバス事業者たちは、地域の利便性が向上することによる成長と長期的な利益を期待して投資していたと理解することができます。

1931年に江若鉄道が開通し、1937年には国による省営バスが今津から若狭方面に向けて走り出しました。以降戦後に向けて、少しずつ高島のバス路線の姿が出来上がっていきます。

ここで日本の経済成長における高島市域の位置づけを確認しておきましょう。図4は1975年を1としたときの、製造品出荷額と1人あたりの課税対象所得の推移について高島市と全国を対比したものです。製造品出荷額はその年の対象地域に所在する製造業の事業所における製造品出荷額などを表します。言わば、地域における製造業の景況を表します。また、課税対象所得はその地域に住民票を置く人びとの所得のうち必要経費、基礎控除、配偶者控除などを差し引いた金額です。図4に

示されるとおり、課税対象所得の推移は全国平均（黄色点線）と高島市（灰色点線）との間に大きな違いがないことが見て取れます。また製造品出荷額について、1980年代以降は高島市域において全国平均を上回るペースで上昇しつつ、全国平均とほぼ同時期に増減を繰り返していることがわかります。このように高島市域の経済成長は規模の大小には違いはありますが、全国の傾向と同じように推移してきました。

一方で、図5は高島市域と全国の人口増減を、1975年を基準として比較したものです。人口が全体的に逡減ながらも増加している傾向は高島市域と全国で共通をしていますが、高島市域のほうが人口の増加が緩やかであり、かつ人口の減少が始まるタイミングは全国よりも早いことがわかります。経済の発展は全国と同様かそれ以上の傾向で進んだのに対して、人口増加が緩やかであったということが、高島市域の社会経済の変化の特徴としてみることができそうです。

市内のバス交通のあり方グループ

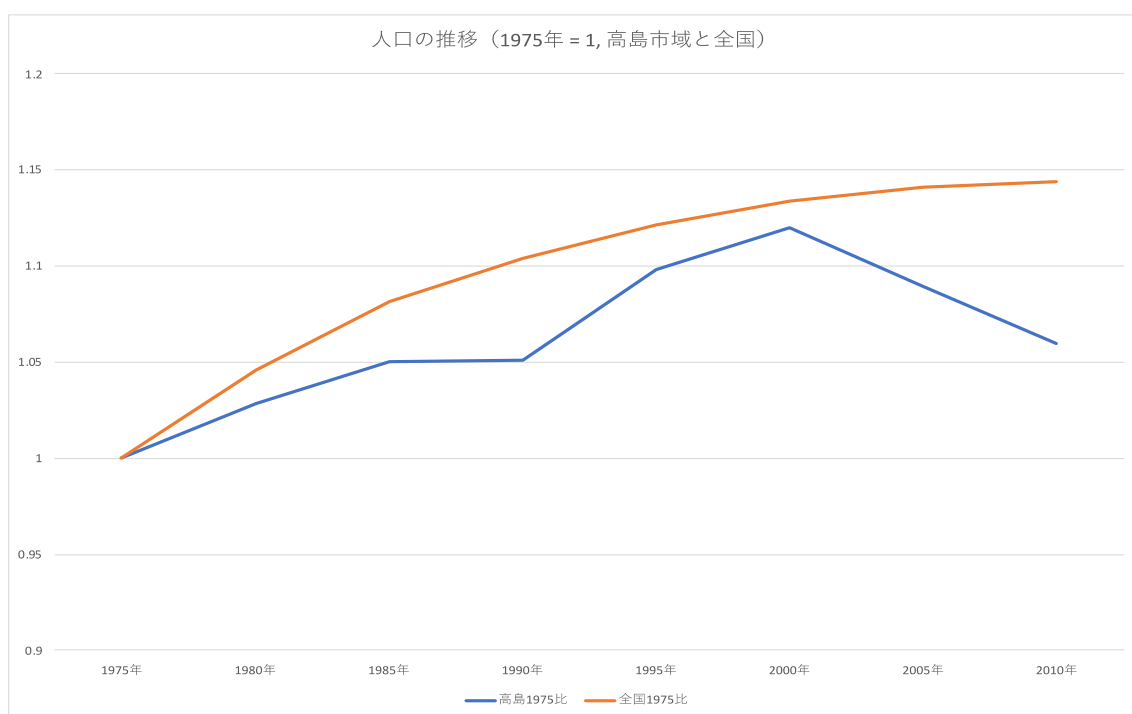


図5 高島市と全国の人口増減の比較

高島市域の人口増加に応じて、バス交通のネットワークもこの半世紀で拡大してきました。図6は1970年から2019年までの高島市域のバス路線とバス停、および地区の人口増減を示したものです。青の点が1970年にはあったと思われるバス停、橙色の点が2020年10月の時点で設置されているバス停、黄土地色の線がバス路線（2010年時点）、地区に塗られた色が人口増減を表します。紫色や青色の地域は人口が大きく減少する地域を表しますが、その一方で高島市域のバスはその地域の人口増減に関わらず広く分布していることがわかります。これは人口増加に伴ってバス路線が拡大していった経緯と関係します。

町史や村史によれば、戦後の経済成長期にバス交通のネットワークが拡大した背景には、各町村による投資があったことがわかります。安曇川町は1950年にスクールバスを導入して以降、1956年にもバスを購入、1981年に福祉バス「あどがわ」を運行開始しています。朽木村は1972年に総延長49.455km、

25の村道の整備が進捗し、前後してバス路線を伸長しています。2000年前後には高島、新旭、マキノの各町でも循環バスの運行を開始させています。

総じて、高島市域のバス路線は当初は大津・京都や若狭への南北縦断交通としての役割が大きかったところ、江若鉄道や湖西線の開通によりバス路線は鉄道による南北交通の補完、および沿線周辺地域と鉄道駅を結ぶ役割に切り替わっていきました。一方で南北縦貫のバス路線はしばらく無くならず、江若鉄道が廃線になったあとは湖西・大津間の交通を担いました。湖西線が開通し沿線人口が増加した後、バス路線は沿線と鉄道駅を結ぶ役割にシフトしていましたが、かつて南北を貫いていた路線もコミュニティバスの路線の一部として存続している部分もあります。

市内のバス交通のあり方グループ

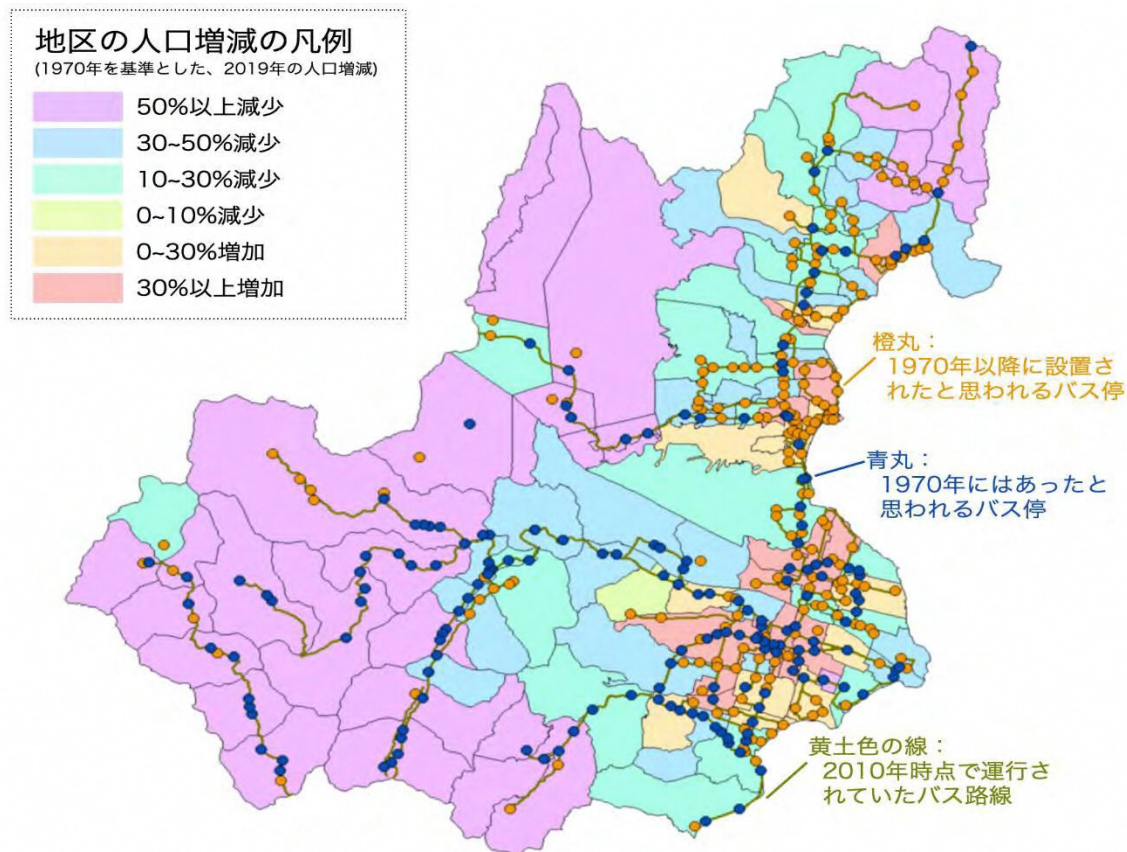


図6 高島市のバス停留所と地区の人口

4. 公共的移動を支える地域インフラとしての取り組み

高島市においては、バス路線自体が大幅に削減されるということは、現時点においては起きていませんが、路線バスからコミュニティバスへ、コミュニティバスから乗り合いタクシーへと、経費削減のために運営を小規模化する取り組みが進められています。日本全国を見ると、すでにバスの本数が大幅に削減されたり、そもそもの路線自体が廃止になったりしている地域も現れています。このような地域を中心に、地域住民やボランティア団体などによる、移動支援の取り組みが進められています。

高島市においても、例えば朽木地域でくつき外出サポート隊が、地域住民の診療所や買い物、郵便局などへの移動を、住民同士が支えるための活動を実践しています。他にも、買い

物サポートとして、移動販売の実施などの取り組みも進められています。このような活動は重要であり、取り組みが広がることが期待されています。しかし、住民によるボランティア活動を中心とした運営においては、活動や事業の継続性の面において不安を抱えているのも事実です。これらの取り組みは、地域住民のこのまちを良くしたいという思いや地域への愛着などによって支えられているのが実情ではないでしょうか。

また、これらの住民同士の支え合いが、バス交通問題を解決する手段となり、これらの活動が広まってくると、ボランティアベースの取り組みということもあり、利用者負担が少額であることから、図7にまとめるように、残されていたコミュニティバスや乗合タクシーなどの利用者がボランティアによるサービスに移行することでさらに利用者が減少し、バ

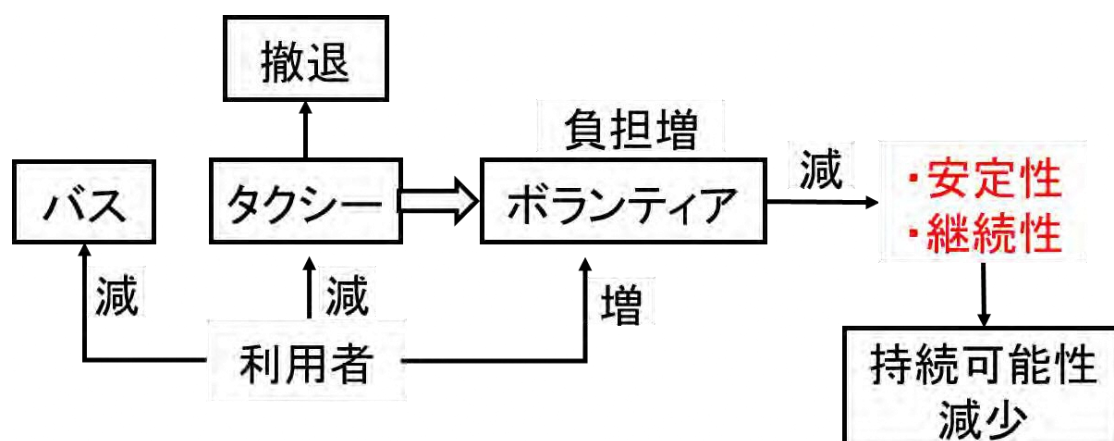


図7 ボランティアによる移動支援と既存事業との関係性

スやタクシーが撤退するリスクも考えられます。

高島市では、バス事業は既に赤字であり、市からの補填があるとしても、利益を上げるといふビジネスの視点においてはこれ以上の拡大は難しく、企業がバス交通を維持するという動機はかなり低くなっていると考えられます。このような状況でも、高島の地域でバス交通を支えているのは何故でしょうか。前章で振り返ったように、高島地域のバス交通の歴史においては、この地域の発展や、より便利で豊かな暮らしの実現のためにという目的から、地元の有志達がバス交通を立ち上げたという経緯があり、利益が得られなくなったために即撤退ということにはならなかったのではないのでしょうか。すなわち、バス事業の立ち上げ及び発展、現在に至るまで事業を支えてきたバス事業に携わる人々のプライドにより、様々な課題を抱えつつも続けてきたのではないかと考えられます。

5. 高島市民を巻き込んだ議論のために

高島市のバス交通が抱える問題とその背景であるバス交通の歴史、今後の10年間の見通しなどを検討すると、高島市のバス交通はいわゆる利益を追求するビジネス的な手段としては大変厳しい状況にあると言えます。しかし、市が掲げる方針にあるように、市民の移動手段を守るといふ点においては、ますます進む高齢化社会において、自家用乗用車を利用できない人の割合が増えることも予測されることから、より福祉的な側面で重要な公共的役割を担っていくと考えられます。

しかし、もちろん今後もずっとこのままの状況でよいというわけではありません。高島市で進む、少子高齢化と人口減少により、バスの乗客数も減少していくと考えられ、現状のバス路線を維持しようとする、運賃収入はさらに減り、赤字額は増えることが予測されます。図8は将来の高島市内を走るバス路線の乗客数と赤字額を、過去のバスの運行実績と将来の人口推計をもとにして推測したものです。各年のバスの乗客数（青線）は、2018年（実測値）から減少していき、10年でおおよそ5%減少、20年でおおよそ20%減少すると推計されます。また単年度赤字額は、2025年の

市内のバス交通のあり方グループ

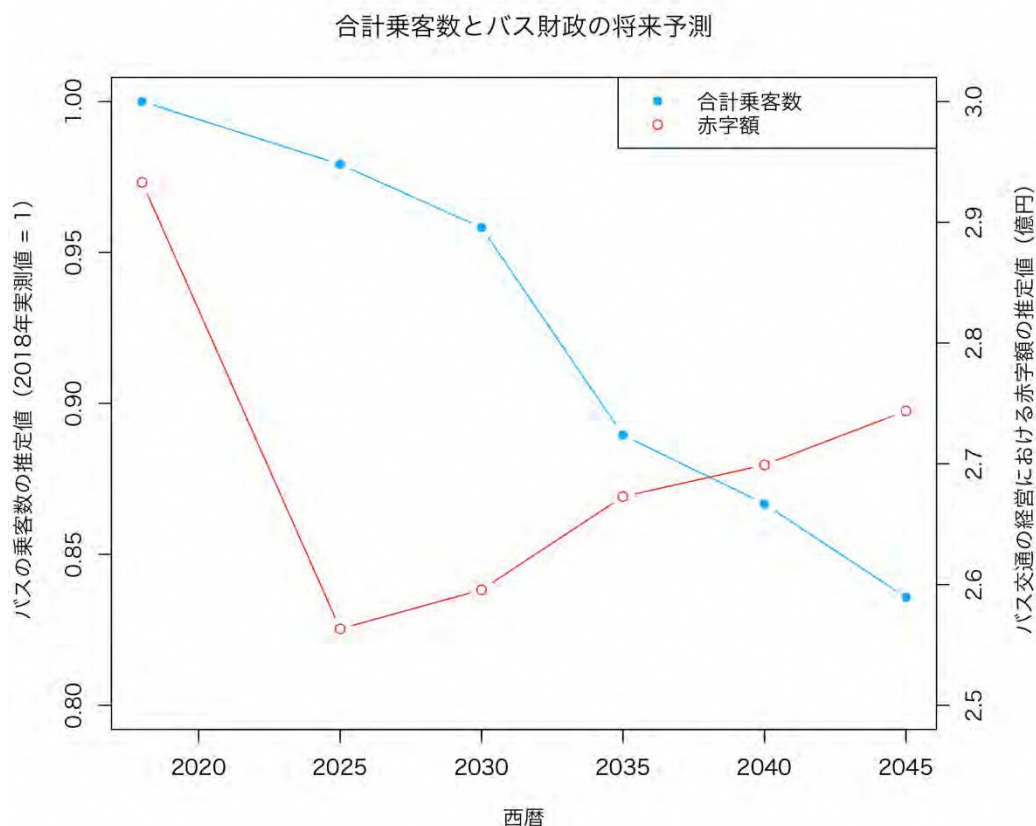


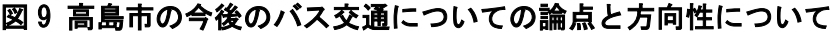
図8 高島市内を走るバス路線の合計乗客数と赤字額の将来推計

2.55 億円から増加していき、2045 年度には 2.75 億円となると推計されます。なお 2018 年度から 2025 年度に赤字額が改善されているように見えるのは、第一に、2019 年（令和元年）に利用者数が著しく少ない路線を統廃合・減便したことで赤字額がカットされたこと、第二に、統廃合などに応じて新設された路線（森線など）については過去データを参照できないため乗客数と収益、コストを推定できていないことが挙げられます。

私たちは、10 年、30 年、50 年先の高島市を見据え、今後のバス交通の利用実態を踏まえたうえで、公共交通として守るべきものは何か、変えるべきものは何かについて、市民を巻き込んだ“継続した議論”が必要になると考えました。そこで、今後 10 年間を一つの目安として、高島市のバス交通について現状を把

握した上で議論すべきと考える論点を 5 つに整理し図 9 にまとめました。

まず、「①変化する社会に合わせてニーズをどう満たすのか？」では、少子高齢化と人口減少が今後 10 年間でさらに進むと考えられる高島市においては、公共交通に福祉的な視点が重要だと考えられます。車を持たない人々の移動手段として、通学や通勤、通院、買い物などの移動ニーズを支え、より利用しやすいバス交通のための議論が重要だと考えます。また、現状においても、バスの運行時刻や乗り継ぎ、路線経路の問題で、バスを利用したいのに、利用できない人がいるという話もあります。このような人を一人でも減らすために必要なことについての議論が求められています。



「③バス交通を支える仕組みの構築」では、先に述べたように、現在高島市の公共交通は約３億円の赤字を出していますが、市の税金によって補填されてサービスが提供されています。しかし、今後も市の税金により賄う仕組みで良いのでしょうか。なかなかバスに乗る機会のない市民も、少しでも支えることができる仕組みについて、議論することが重要です。

最後に、「⑤市民のライフスタイルに適したバスシステムの検討」では、決まった時間に決まった場所から、決まった路線で目的地に向かうという、バス交通の仕組み自体が、自家用乗用車に置き換えられたのは、市民のライフスタイルに合っていないからではないかと考えます。推進会議でも、自分の生活の中にバスを取り入れてみようと考えてみまし

市内のバス交通のあり方グループ

たが、現在の高島市に住む多くの人々にとって、生活上での移動手段としてのバス交通の仕組みが合っていないのではないかという結論にたどり着きました。バス交通の仕組み自体は、フリー乗降区間の導入など、少しずつ変わっていますが、より市民のライフスタイルに適したバス交通システムとはどのようなものなのか、より利用しやすいバス交通システムを作り上げる上で、議論することが重要と考えます。

6. 高島市のバス交通

これからの10年へ

◆バスはどこへ向かう？

時代の変化に合わせ社会の仕組みも変わってきました。人口減少と高齢化が進む中で、バスを必要とする人は変化していきます。変化とともにバスもなくなっていくかもしれません。路線の縮小、時間帯や本数の減少など、そうした未来も想定できます。しかし、多くの市民がバスに関心を向けることができれば、バス交通も新たな仕組みの中で走り続けることができるはずです。

◆将来へ、ライフスタイルを備える

今、暮らしの中でバスを使っていない人が、車の運転ができなくなった時のことを考えて、歩いて暮らせる場所への移動を検討することも、将来への備えとなります。またバスを使って暮らす練習をしておくことも一つの備えとなります。

10年先を見ると、今あるバスも、「**今あるものがあたりまえじゃない**」という時代になっているのかもしれません。

7. バスをとおして考えること

◆暮らしを支えるものに気づく

私たちは、バスの歴史を調べ、バス運営の背景を聞き、バスを通じて高島市について考えることで、暮らしを支える仕組みに気が付く機会になりました。市民がバスに関心を向けることで、一人ひとりが、見えていなかった仕組みに支えられていることに気が付くきっかけになればと思っています。

◆「豊かな不便さ」がある暮らし

「バスは不便」と言われますが、便利さばかりを求めていると、豊かな時間を無くしそうな気がします。バスから見える風景、バス停やバスの中での人との交流など、便利さだけではない「**豊かな不便さ**」がある**高島らしい暮らし**があるのではないのでしょうか。

◆便利さの先、削られたまちの特色

バスができてきた経済成長期、そのまちの特色のようなものが少しずつ削られてきて、全国どこでも似たような、都会も田舎も変わりなく暮らせるようなまちができてしまったのかなと思います。本当は、もっと特色のある地域があった気がします。

8. 市民の関心をバスに向ける 「ゲーム」戦略

目の前に困難なことや問題が現れたら、どうするでしょうか。

上手くいく方法を考えたり、知恵を出し合い工夫したりしながら問題解決に向けて考えたりするものです。しかし「まち」という視点では、人々の日々の暮らしの中で直接的に関係することのないような問題は、「ヒトゴト」のように思えるばかりか、まったく無関心のままです。そうした観点で見れば、大半の人々にとって「バス」とは暮らしの中にある風景的なもので、関心を向けて考えることなどないのが現状なのでしょう。

だからこそ今まで通りではダメだ

パンフ、報告書、広報誌、綺麗に目を引くように上手に作ってはありますが、伝えようとするより、続けることや作ることを大事にしているとさえ思えてくるもの。上手く伝えようとすればするほど固くなるし、難しく感じるものです。

関心を向けてもらうために 必要なコト！

- ① 発信することに対して行政的な固いイメージを捨ててみる。
- ② 人々が楽しいと思えるようなことを考える。
- ③ なにか新しいことが始まりそうな予感を感じさせるようなワクワク感を演出してみる。
- ④ どうしたら伝わるのか？ではなく、どうしたら遊びに来てもらえるのか？（参加型）の発想を持って斬新な切り口で、「楽しく学べる」仕組み作りを企画してみる。

人々を寄せ付けるもの

関心を向けてもらうということは、人を寄せ付ける魅力的な何かが必要です。感動的な映画仕立てにするのも良いし、市民参加型のお芝居にするのも良いと思います。しかしながら「伝える見せ方」という手法は、なかなか成果が上がらず効果が期待できないような気がします。見た瞬間に知ることはできても広がる運動のようにはいかないことが多く、感じたことを個人的な思いとして完結してしまうような気がしてなりません。

真面目に誇れる遊び心を

いろいろと議論を繰り返していくと、伝えることの仕組みの中に、楽しみながら学べるようなことが必要なのではと考えるようになりました。関心を持ってもらうために論点を整理し成果として報告することも大切ですが、まずはバスのことを知る機会が必要なのです。

誰もが勉強や仕事、ましてや報告会と聞くと難しく思えてくるものです。ようはイメージなのかもしれません。潜在的にそう感じるなら逆の発想を持って「楽しそう」と思えるものを提案できないか。体験的な記憶、潜在的な意識、高揚する経験。自由な発想で遊べて学べるツールをバスをテーマに作ることができれば、素晴らしいことです。言わば「遊学」的な感覚で少し離れてバスを見ることで、新たな視点や気づきが生まれ、関心に繋がるができると思うのです。

ゲーム作りの可能性

ゲームとは、答えやゴールを導くために、様々な困難やトラップに知恵を絞り工夫をしながら解決していくもので、時には協力もしながら道を切り開きクリアを目指すものです。また、社会のできごと、約束ごと、人と人のふれ合いなどを遊びの中で反復し、問題は何かを確かなものにしていく役割を果たしています。

抽象的ではあるものの、多角的に想像力を駆使し、工夫して遊びを生み出し発展させるという点で、創造力を豊かにさせ、バス交通の抱える課題解決に向けた新たな思考を生み出すことでしょう。

毎日の暮らしの中にある問題を、身構えることなく「考えられる・受け入れられる」ことができると同時に、ゲーム体験を通じてバス交通の「メカニズム」や「問題点」を知ることができます。また、世代を超えて遊びながら学べるツールとして、世代間意識の共有にも繋がり、バス交通以外の課題にも目を向けてもらえる可能性が広がるかもしれません。市民が楽しく遊びながら学ぶことのできるこうしたツールは、豊かな時間の流れと、人々の息遣いを感じながら、他とは違う「高島らしい」課題解決に向けた、進むべきあり方なのだと思います。

これからの10年。何が正解か？

失敗を恐れてばかりでは進めない道もあります。とはいえ、果敢に挑戦するばかりで、人々の暮らしを脅かすものであってはなりません。僕らのゲームは、最初は小さな存在かもしれませんが、手に取り遊びながら、ここで暮らす人々と呼吸を合わせ「楽しく学べる」と人々に伝播していけば、大きな波紋となって自然と知ることができるばかりか、

関心へと繋がっていくでしょう。何かを変えていくには、まずは市民に関心を持ってもらうことがとても大切なのです。

バスゲームが目指すこと

- ・バスについて、楽しみながら触れることができる
- ・高島市のバスの背景が見えてくる
- ・バスのことを話したくなる
- ・バスに乗りたくなる
- ・自然に、バス以外にも、まちには課題があるのでは、という関心が生まれる
- ・ゲームという仮想世界で、高島市を離れ、高島市のよさが分かる

などなど可能性はひろがるばかりです。



高島のバス交通年表

年月日	出来事	私営	官営	市町村営	高島	安曇川	新旭	今津	マキノ	朽木	京都三條・大津方面	若狭方面	京都大原方面	長浜方面
1923年	バスの創業 高島郡 今津～大津間					○	○	◎			◎			
1923年3月	今津～大溝間 定期運行					◎	○	◎						
1924年4月	今津～海津間、大溝長尾間 定期運行					◎	◎	◎	◎					
1925年9月	船木～安曇川間、船木～安井川間 定期運行 宮田自動車	○				◎	◎							
1926年5月	大溝～船木間 定期運行					◎	◎							
1927年12月	今津から熊川までバスが運行							◎				◎		
1927年	江若鉄道(株) 大溝まで													
1928年7月	今津～三宅(小浜) 私営バス運行	○						◎				◎		
1930年	江若鉄道 大津～今津 全通													
1931年	江若鉄道 大溝～今津間 バス営業開始	○				◎	○	◎						
1931年	湖西自動車(株) が営業難しくなり消滅													
1932年9月	省営バス運行開始		○											
1933年	安曇～岩瀬 定期バス					◎				◎				
1937年12月	今津～小浜間 開通							◎				◎		
1937年12月	省営バス 今津～熊川間(若江本線) 営業開始		○					◎				◎		
1940年8月	省営バス琵琶湖本線 今津～木ノ本 蛙口～北牧野 開業		○					◎	◎					◎
1948年	浜大津～今津間 江若バス開通	○				○	○	◎			◎			
1950年	江若鉄道 安曇川駅～橋生 開通					◎				◎				
1950年	その後、堅田町中村(現：大津市)麻生、雲栖谷に延長													
1950年	安曇川町スクールバス1台を購入			○		◎								
1953年	高島町山手線(黒谷まで運行) 開通 江若鉄道					◎								
1953年	富坂口～安曇川～高島町駅～黒谷 運行					◎								
1953年	押戸～安曇川町田中 運行					◎								
1956年	国鉄バス若江線 今津～浜大津間(江若バス相互乗入れ)					○	○	◎			◎			
1956年	安曇川町バス購入			○		◎								
1958年	路線替え一旦廃止													
1958年	新しく①朽木・小浜、②麻生・梅の木線、③市場・五番領・鴨池、④市場・野田・鴨線の四線に変わる													
1962年	京阪バス 京阪三條～浜大津～今津 開業					○	○	◎			◎			
1963年	高島町 黒谷～畑 運行					◎								
1965年	国鉄バス 今津～敦賀間 全通		○					◎				◎		
1965年	高島町 高島町～学校前～武蔵横山 運行					◎								
1969年	江若鉄道廃止													
1969年	代替に江若交通バス事業開始 安曇川～浜大津間 260円	○				○	○	◎			◎			
1969年	市場～椋川～保坂～今津 運行開始							◎		◎				

高島のバス交通年表

年月日	出来事	私営	官営	市町村営	高島	安曇川	新旭	今津	マキノ	朽木	京都三条・大津方面	若狭方面	京都大原方面	長浜方面
1971年	市町村協議会振興整備計画：国鉄湖西線開通後における圏域内の各駅を起点とするバス路線については各生活圏を結ぶ交通網として整備する													
1972年	村道の路線25超 49.455km“陸の孤島”でなくなる													
1972年	新旭町：マイカーの増加による路線バスの赤字により国から補助													
1974年	湖西線開通													
1981年	安曇川町福祉バス「あどがわ」運行開始			○		◎								
1982年	村役場～針畑～麻生横谷線									◎				
1982年	巡回バス運行開始 村役場起点（村営）→針畑線 宮前坊柏線 栃生右測線 拡大									◎				
1983年	新旭町一回のバス運行の利用者0.9人に。町負担の増加。													
1984年	新旭町23台のバスを保有、高島郡全体で109台を保有。													
1993年	高島町 鴨川平バス停を新設													
1995年	観光休暇村 朽木学校前 バスターミナルが完成													
1995年	朽木村営バス 麻生横谷線 運行開始			○						◎				
1997年	JRバス全線廃止（町内へき地バス廃止）													
1997年	マキノタウンバス運行開始			○					◎					
1997年	京阪バス 京阪出町柳～朽木学校前 運行開始	○								◎			◎	
1998年	村営バス 針畑線 運行開始			○						◎				
2000年	JR近江今津駅～市ヶ崎 あいあいタウン線開通 低床式バス（ノンステップバス）導入							◎						
2000年	高島町町内循環バスの運行開始			○	◎									
2001年	新旭町生活路線バスの運行を開始			○			◎							
2002年	安曇川町「ふれあいバス」100円福祉バスの運行開始（予約制）			○		◎								
2003年	安曇川町内路線バス（古賀線、朽木線、船木線）利用促進													
2003年	高島町観光協会史跡めぐりバスの運行				◎									
2005年	高島市合併													
2006年10月	コミュニティバス運営220円均一に統一													
2007年3月	高島市総合計画「都市基盤整備計画」													
2007年3月	鉄道とバス体系との連携による市内交通ネットワークの形成が望まれている。子どもや高齢者の交通手段として欠かせないバス路線については運行費用の抑制を図りながら利便性の向きが望まれる。													
2010年	この頃、比良線（出町柳～朽木学校）が土日のみ運行に。		○							◎			◎	
2011年4月	乗合タクシー制度スタート													

行き先・経由地の凡例：

◎：始点 終点 ○：経由地

第3期 まちづくり推進会議

地域とのつながりを生み出すための地域行事グループ



「高島市のことをもっと知ろうと思い参加させていただきました！これからも高島市の魅力を発信していきたいと思います！」

奥澤 航一郎

おくざわこういちろう/1989年生まれ。安曇川町出身。世界一周の旅を経て、高島市に戻ってきました。高島チャンネルのこうちゃです！



「高島市の青年団に所属しています。地元の人同士のつながりはどうやったら作れるのか気になって参加しました。」

安原 翼

やすはらつばさ/1992年生まれ。安曇川町に生まれる。大学進学で一旦高島市を出たが、就職を機に高島市にもどる。



「高校生の時に推進会議に出会い、興味を持ち、参加してみようと思いました。会議を通じてたくさんのことを学び、少しでもまちづくりに協力できればいいなと思います。」

白崎 蓮

しらさきれん/2000年生まれ。高島市に来て10年、現在20歳です。趣味はラジオを聴くこと、神社巡り。将来の夢はラジオDJ（ラジオパーソナリティー）になることです。



「まちづくりに興味があってきました！高島市に来てまだ半年ほどですが、自分の視点が役にたてば嬉しいです。」

藤井 亜子

ふじいあこ/1995年生まれ。長野県安曇野市出身。夫（朽木出身）との結婚を機に高島市へ。現在は通信制大学で学ぶ一児の母。



「生まれ育った高島市をもっと盛り上げたい、さらに住み良いまちにしたい！との想いで取り組みます！」

桑原 勇人

くわはらはやと/1988年生まれ。安曇川町出身。高校から高島市を出て、就職を経て12年ぶりに高島市にもどる。一児の父。



「高島市生まれの高島市育ち！夫が残してくれた宝物の娘も社会人になり親の役目を終え、何か地域のお役にたてることはないかと思っているところで〜す！」

杉原 清美

すぎはらきよみ/1960年生まれ。今年還暦を迎えたおばちゃんです。学校を卒業後福祉の現場で働き、結婚を機に退職。専業主婦となるが物足りず、その後は病院で働くも、再度福祉の仕事に戻り現在に至る。

地域行事ってどんなもの？

地域とのつながりってなんだろう？

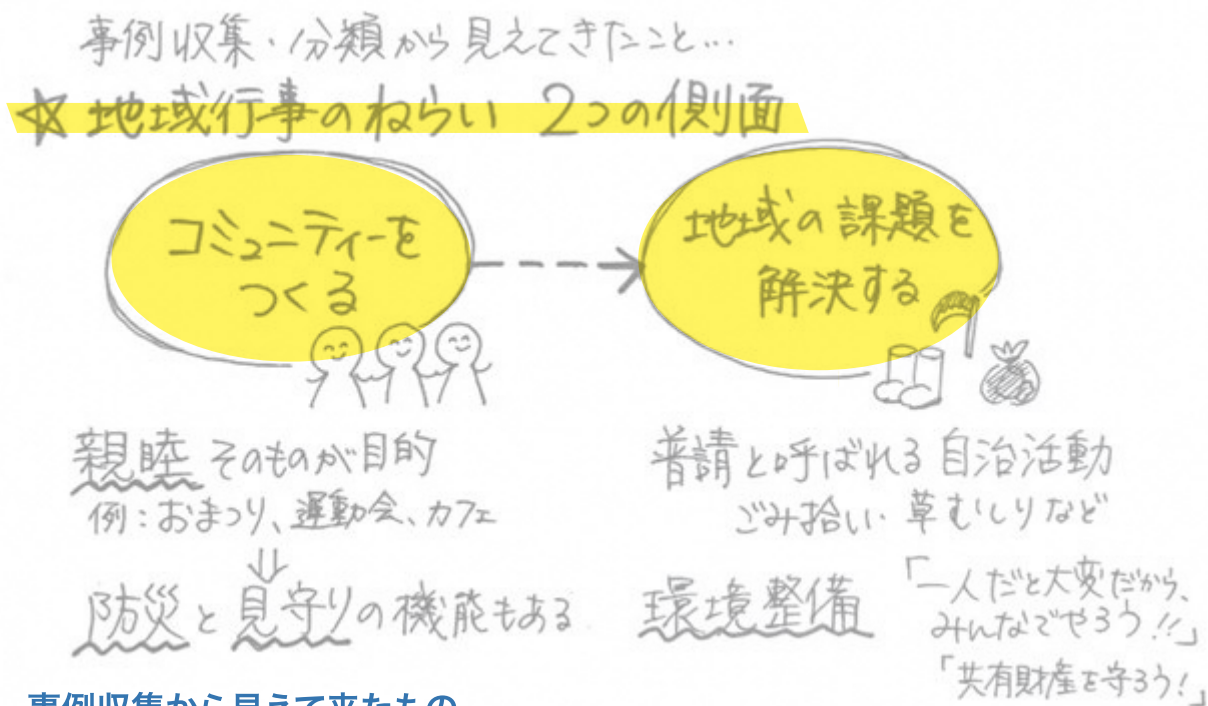
私たちは2年間、地域行事をテーマに会議を続けてきました。

地域行事と聞いて、あなたはどんなものを思い浮かべますか？

お祭り、こども会、スポーツ大会、清掃活動。ワクワク楽しいもの、ちょっと面倒なもの。

コロナ禍の今こそ！同じ地域に暮らし、集うということを一緒に考えてみませんか？





事例収集から見えて来たもの

それぞれメンバーの住んでいる地域で開催されている行事や、自身が参加している行事を列挙すると、地域ごとの祭りなど伝統的な行事、草刈りや川掃除など区・自治会活動(こども会、青年団、消防団、自警団、婦人会、老人会)や、コミュニティを作るためのサロン活動等、一口に地域行事といっても様々なものがあることがわかりました。

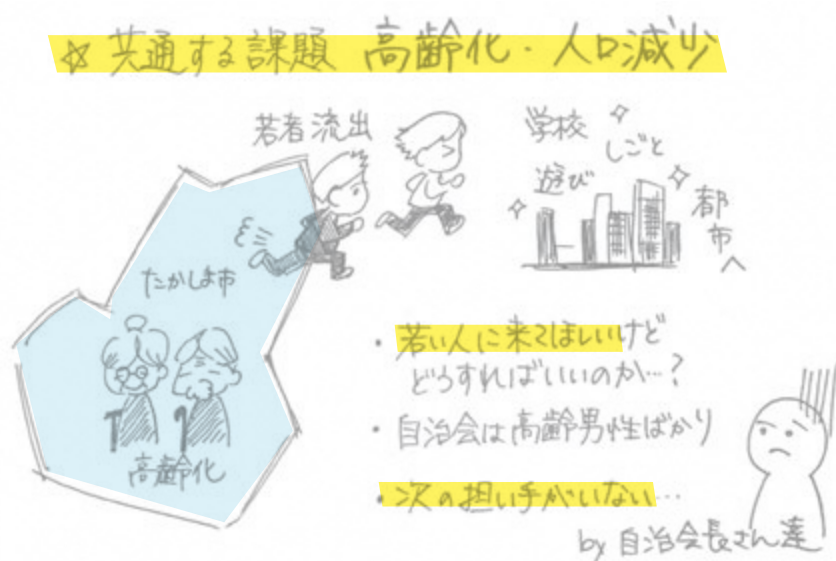
地域ごとの祭りや伝統行事に関しては、開催されていること自体を知られていないことが多く、特に若い世代はその名前や内容も知らない行事がほとんどでした。地元出身の人は、幼少期に親と参加していたり、口伝で聞いたりすることで近隣地域の行事はなんとなく知っていても、結婚や仕事などのご縁があって高島に移住をしてきた人、就学や引っ越しなどで長く地元を離れて帰ってきた人は行事の存在を知る機会や方法が少ないと考えられます。

後継者がいない

区・自治会活動に関しては、昔はあった青年団や壮青年会、老人会をはじめ様々な活動が衰退し、参加への強制力も弱くなっています。伝統的な行事を絶やさず受け継いで欲しいとの願いがある一方、どの団体も後継者が少なく、その維持は誰が、どのようにしていくのか課題が上がっています。

核家族化やライフスタイルの変化により人との繋がりが希薄化している社会に対して、「世代を超えた繋がりを作りたい」「誰もが立寄れる場を作ろう」という想いのもと、住民有志による「地域サロン」や「地域カフェ」、「ふれあい食堂」などのコミュニティを作るための活動がされています。

全国平均0.22%程度といわれる人口減の中、高島市は毎年1%以上もの人口が減っており、若者が流出することで、区・自治会の担い手の減少とさらなる高齢化が進み、環境整備や祭りや神事ごとの維持が難しくなっています。



★高島市にある見えないカベ

①世代のカベ

シニア



- ・すでにコミュニティが有る
- ・時間に余裕が有る
- ・体力▲

このままでは持続できない

若い人も来てほしい

どうして自分の地域のことを人任せにしているの??

若者(ミドル層)



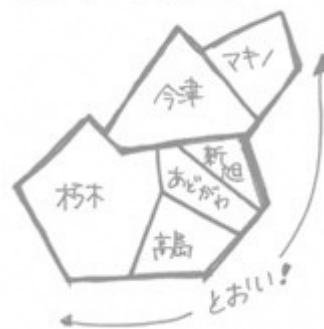
- ・横のつながりが薄いので情報①
- ・時間▲
- ・興味はある...かも...?

仕事が忙しくて参加できない

友だちも行けば私も...

そもそも行事やってるって知らないよ!!

②旧町村のカベ



世代の壁

シニア世代は、既に長年のコミュニティがあり、時間に余裕がある方も多いです。また、地域活動について「このままでは存続が難しい」「若い人はなぜ地域活動に参加しないのか」「自分達の地域の事にもっと関心を持ってほしい」と思っています。

一方、若い世代は、仕事が忙しくて、時間に余裕がなくそもそもやっているイベントも知らない。自分や家族にとって興味がある情報はキャッチするが、それ以外は興味がない。地域行事は、若者の生活スタイルや価値観とズレがあり、行事に参加する意義も分からない。仕組みが古くて考えが合わない人もいます。

若者の力

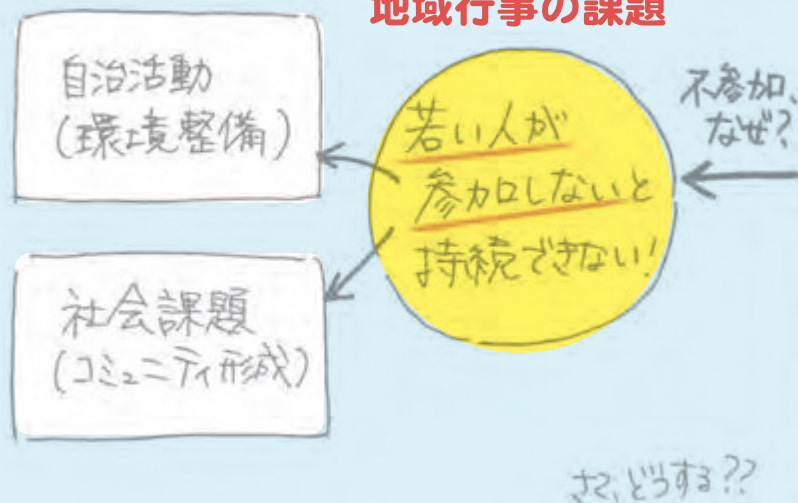
高島の自然や風土を好み、市外から移住して来られた方や嫁いで来られた若い女性もおられますが、地域行事には古くから伝わるしきたりがあったり、溶け込みにくさもあったりするようで、参加をしても良いのか迷う場面があるようです。

高島の良さをより多くの人に知ってもらい、地域を活性化していくためには、地域の持続性の点からみても、若者の力が必要不可欠です。

「地域行事・イベントの開催を知らない多くの若い世代に、認知してもらうにはどうすればいいか」そして「地域のイベントに多くの人に関心を持って集まってもらうにはどうすれば良いのか」2年目に具体的な手法について検討を進めてきました。

まとめ

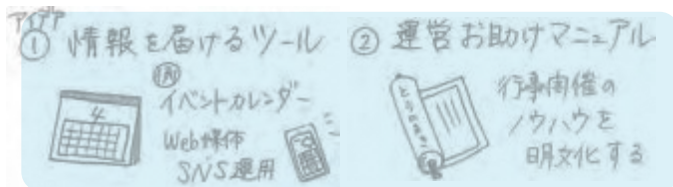
地域行事の課題



- ・知らない
コミュニティがない・情報がない
- ・参加意義わからない
フリーライドしている自覚ない
- ・仕組みが古い・合わない
生活スタイルや価値観のズレ
ルールやマニュアルがない

情報を届けるツールづくり

2年目は、コロナ禍の真っ只中であり会議の開催も難しい中、感染対策に細心の注意を払い進めていきました。若い世代にイベント情報を届けるツールとはどんなものか、実際に地域行事に人を集めるためにはどのような方法があるのか、また、どんなツールがあると声を掛ける代わりの仕組みになるのか、市内の人におすすめ情報を届ける方法について話し合ってきました。



情報を届けるツールとして、イベントカレンダーを作るワークショップをしました。冷蔵庫など家の中でよく見る所に貼り、イベント情報が見える化できる紙媒体、あるいは若い世代が使うSNSの運用などにより情報を発信できればと考えました。

また、高島市内でのイベントの運営に使えるマニュアルを作り、イベントの企画をしやすくすることで、若者主催のイベントが増加し、イベントへの認知や関心につながるのではないか、といったアイデアも出ました。

しかし、イベントカレンダーやマニュアルを作った場合、今後誰がどのようにして継続していくのか、既にイベント

を紹介している素晴らしいサイトはあり、また無数にある地域行事の中から対象とする行事をどのようにして選ぶのか、誰を対象にするのかといった疑問や問題を感じ限られた時間での実現は難しいと気づきました。

地域行事を知らない若い世代に情報を伝え、参加をしてもらいたい。地域の行事に参加することで、人や地域とのつながりを持って欲しいと願いは膨らむばかりです。特に、幅広く「若い世代」を対象にしていたターゲットをさらにしぼることにしました。



誰のためにつくるのかを考えることで、それぞれ違うかたちのカレンダーが完成。ターゲットを決めることの重要性が見えてきました。



第2期 高島市まち・ひと・しごと創生総合戦略より（一部抜粋）

基本目標2 高島とのつながりを築き、高島への新しい人の流れをつくる

- ・高島市の魅力を学ぶ多様な体験の場づくりと、人とのつながりを育むキャリア教育の推進
高島市で暮らす子どもたちが、高島市の魅力を深く認知し、年齢に合わせた多様な場面で地域の事業所の事業内容や取り組み、特色などを知る機会を設け、将来高島で活躍するUターン人材の育成につなげる。

基本目標3 結婚・出産・子育ての希望をかなえる、人に優しい高島をつくる

- ・出会いを創出するとともに、魅力ある子育て支援策の実施と高島市らしい子育て環境の周知
結婚や子育てに関する不安を取り除く相談体制を構築し、子育て世代の多様なニーズに対応するとともに、経済的な負担を軽減し、誰もが安心して子育てできるまちをめざす。

子育て世代に
高島市も注目!!

★ 20～30代 子育て家庭にターゲットを絞る

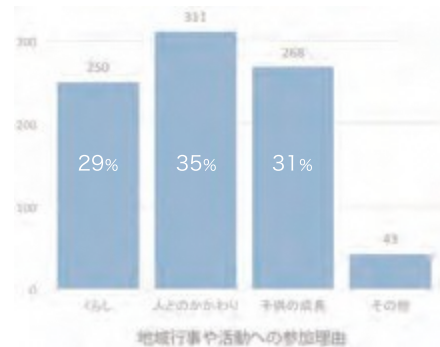
- 理由
- ・ 住む場所を長い目で見て考え始めるタイミング
 - ・ パートナーに合わせて移住した人も多く、孤独を感じる人も
 - ・ 高島市は子育て支援に力を入れている



子育て家庭をターゲットに

結婚をしてから住む場所を決めるのは、8割が女性であると言われています。高島には結婚を機に移り住む女性が比較的多く居られます。その理由の一つには、高島市は子育て支援が充実しており、子どもを育てやすい環境であることがあげられます。しかし、お母さんと地域を結ぶ方法は自らが開拓するしかありません。保育園や小学校に入れば多少のお母さん同士のつながりはできますが、それまでの間は特に地域とのつながりもなく孤独感を感じながら生活をされているようです。

地域行事に子ども連れで参加しやすい環境があれば、幼児期から親子そろって地域と関わり、人とのつながりを経験し、高島の良さに気づくことができます。お母さんは地域行事を通して人とのつながりを得られます。子どもは学校を卒業し一旦は都会に出て行ったとしても、高島の良さを思い出し、地元に戻って結婚や子育てをしていくという正の連鎖が起こることをイメージしました。そこで、子育てをしているお母さんを地域とつなぐ方法について検討をしました。



子育て世代へのアンケートで、自治会活動に年間平均1回以上参加すると回答した方に地域行事や活動への参加理由をたずねた項目では「**地域の人とのかわりが必要だから**」と答えた人が35%、「**子どもの成長に必要なから**」と答えた人が31%であった。

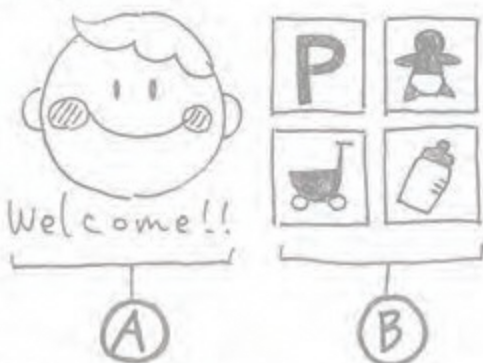
(第2期高島市まちづくり推進会議報告書より引用)

地域には色んなイベントがありそれぞれ情報も発信されていますが、子育てをしているお母さんにとっては「子どもを連れて行っても良いのか」「子どもがぐずったときに迷惑をかけないだろうか」「途中退席は大丈夫なのか」「オムツの交換や授乳をしたいけれど、場所はあるのかなあ」など、子どもの世話ができる環境や周りの理解が得られるかといったことが心配であり、なかなか出向けないのが現状のようです。そこで提案するのが、「子ども連れ歓迎」マークです。

アイデア

「子ども連れ歓迎」を表すマークをつくろう！

[※ イメージ]



①は「子ども歓迎」の意思を表す部分

- ☑ 話し声などの音 OK
 - ☑ 途中退出・再入場 OK
 - ☑ サポート役のスタッフがいる
- 項目全てを満たすことで表示できる。

宣言する

②は機能を表す部分 (ベビーカー利用可否、駐車場、授乳室、オムツ替えスペース有無、)

子ども連れ歓迎マークの提案

若い世代と地域とのつながりを生み出すきっかけとなることをイメージしています

これは提案のためのサンプルイメージです



子どもがおはなししても大丈夫！
泣きやまない時は途中で席を外して
落ち着いてから戻って来てもいいよ
困った時は気軽に声をかけてね！

地域行事のチラシや web サイトにのせることで「子ども連れ歓迎」の意思表示ができるマークです。



子ども連れのお母さん、お父さんにとって駐車場やおむつ替えのスペースの有無は大切な情報です。
歓迎マークとともに、左のような機能を表すマークも表示することをおすすめします。

面白い行事をやっているけど、来てくださるのはお年寄りばかり

若い人たちをどうやって誘ったらいいかわからない

行ってみたい行事があっても、子どもが騒いだり泣き出したりして迷惑をかけるのではないかと気兼ねしてしまう…

高島市に來たばかりで、ご近所さんのこともよく知らない

誰か頼れる顔見知りがいるといいのに…

人との交流は楽しいけれど、時には勇気がいるものです
心の壁を越えるためのきっかけを作れないか？
そんな考えから、子ども連れ歓迎マークをつくりました

誰かに「来てね」と声をかけるきっかけに
地域行事に興味をもち、参加するきっかけに
市民同士のコミュニケーションのきっかけに

地域の人々が世代を超えてつながることで、
高島市はもっと暮らしやすく、ほっとできる街になります
高島市で育ち、地域に愛着を持った子どもたちは、
大人になってからも故郷を大切に思い、盛り上げてくれるでしょう

このマークが、そのはじめの一歩を応援するものになることを願っています

マークについて

一目でわかりやすく、歓迎の意思を伝えられるデザインが必要です。(ここではマークのイメージとして、たかしまをPRする高島市公式インスタグラムイメージキャラクターである「たかP」の子どもである、たかしまのChildren「たかC」を用いて描いています。)

地域行事やイベントに子ども連れで参加することへのハードルを下げることで、これからの高島市の未来を担う子どもや若い世代が地域と関わる機会が増えることを目指しています。楽しい思い出が地域を愛するこころとなって、つながっていくことを願います。

マークの使用にあたって

高島市のホームページから無料でダウンロードできるものを考えており、主催者の名前、連絡先などを記入の上、子ども連れ歓迎マークと用意できる機能のピクトグラムを選んでダウンロードし、行事のチラシやWebサイトなどで使用していただきます。

またマークの使用は代表者だけでなく、運営をするスタッフメンバーにも歓迎の意思を周知していただき、行事全体で暖かく安心できる空間をつくっていただきたいと思います。



想定されるQ&A

対象としている「地域行事」とはどんなもの?

主催者や内容を問わず、市内の様々な催しを想定しています。(以下想定例)

主催:高島市(市民ホールや図書館)、区自治会、NPO法人、市民サークル、商店街など

内容:コンサート、展覧会、交流会、ワークショップ、清掃や防災訓練などの自治活動、趣味の講座や教室、お祭り、マルシェなど

子ども向けに特化した行事でなくても、歓迎の意思があれば活用していただきたいと思います。

機能のピクトグラムは

必ず表示しなければいけないの?

運営者が任意で表示できるもので、強制はありません。それぞれの行事・イベントや使用会場で設置可能な機能を一目でお知らせするためのものです。

普及のイメージ

まずは市や市民協働交流センターから運営者の方々へと紹介してもらい、市やNPO団体、市民のグループなどいろんな行事で使ってもらうことで徐々に認知度が上がり、マークを探して参加してくれるご家庭が出るなど認知されることを目指しています。また運営者からのフィードバックを得るアンケートなどを実施し、改善・普及につなげたいです。

参加者であるお母さん・お父さんたちには妊娠から出産、子育てまでをフルサポートする子育て支援アプリ「はぐっとナビたかしま(母子モ)」への情報掲載などでマークの意味を広げます。(※「はぐっとナビたかしま」は母子手帳の交付や新生児訪問時に各家庭に紹介されるアプリ。予防接種のスケジュール管理や、市の子育て施設の案内、各施設からの情報などが掲載されています。)

たかしま●●マルシェ

日時 ○月△日(sun)
9:00-17:00

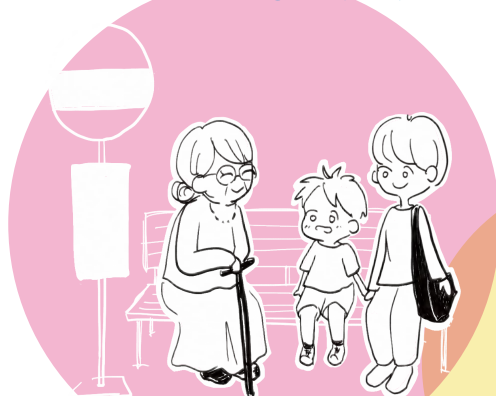
場所 ●●公園
参加費





子ども連れ歓迎マークをきっかけに
地域行事に参加することで、
高島市の中で知り合いが増えていく

私たちが思い描く たかしまのみらい



地域行事に参加することで
顔見知りになった人たちが、
日常のふとした瞬間におしゃべり



今まで知らなかったり
選択肢になかったりした
趣味のイベントや
自治活動に参加する
若者・子どもたち

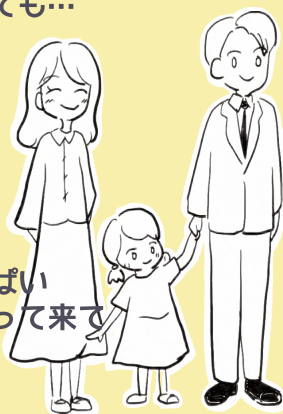


知り合いのいなかった
お母さん同士が晴れた日に
一緒にピクニックへ！



小さかった子どもが学生となり
都会に出ることがあっても...

就職や結婚を機に
楽しい思い出いっぱい
大好きな高島に帰って来て



地域行事の運営者に！
高島の良さ、面白いところ、
ステキな人たちが交わる
きっかけをつくりだす



高島市が活気にあふれ
明るく楽しいでありつづける
そんな未来を夢見ています



特別企画：まちづくり座談会

高島で暮らす、まちをつくる

—第3期高島市まちづくり推進会議をふりかえって—

話し手●杉原清美+藤井亜子+安原翼+山田哲也+吉見大

聞き手●王智弘（ファシリテーター）+坂下靖子（たかしま市民協働交流センター）

はじまりの思い

王●皆さんはどんなきっかけでこのまちづくり推進会議に参加されたのですか。

杉原●私は福祉施設に勤めてるんですけど、夜や朝早い勤務もあった状況から日勤に変わって時間に余裕が出てきた時期に、今まで地域の人にいっぱい助けていただいたから、今度は何か地域のお役に立てることでお返ししたい、させてもらわないといけないと思ったんです。そのときに、このまちづくり推進会議があるということを知って参加させてもらったんですよ。

王●お仕事の転機と地域への恩返しの思いと、第3期のまちづくり推進会議のスタートがちょうど重なったんですね。藤井さんも高島出身の方と結婚されて高島に移住というタイ

ミングでの参加ですね。

藤井●もともと高校でも大学でもデザインのことをやりたいと思っていたのと、自分で会社をやったり、組織づくりに関わりたいという思いがありました。大学で社会学とかまちづくりの勉強もしたので興味はあったんですけど、実際に自分が住むまちでこういうふうに関わるとは思っていませんでした。高島市にきた最初の頃は家でずっと育児をして、お友達も知り合いもいなくて、こもりきっていたんですけど、推進会議には外に出て高島市の人と話すきっかけとか、車の免許を取るきっかけまでいただいた。世界を広げてもらったと思っています。

坂下●それぞれに参加のタイミングがあったのですね。山田さんは第2期から続けてのご参加ですね。

山田●第2期が始まる時には仕事も忙しいし、推進会議の市民委員なんてできるかなと思ったんです。けど、自治会の活動には子どもが生まれてから興味をもって参加してきたので、もうちょっと大きい目線で高島市のことを考えるという内容で、せっかく声をかけてくれたからということで参加しました。

王●安原さんも高島市青年協議会の活動をされていますね。仕事をしながら青年協議会とまちづくり推進会議のかけもちは大変だと思うのですが。

安原●正直モチベーションを保つのが大変でした。それでも来てしまうのは少人数で頑張っていくのは厳しいと思っているから。まちづくり推進会議も参加者が多いほど一人あたりの負担は軽くなって、途中でしん





どくなったり、そこそこにしとこうかとはなりにくくなるんじゃないのかと思ってます。

王●吉見さんは以前から青年会議所の活動や、商工会関係者として高島市の審議会の委員を務められていますね。

吉見●まちづくりに関係する活動は、32、3才から40才まで、祭りをやったりいろいろしたけど、同年代の友人や先輩後輩からは「まだやってるんですか、まちづくり」と言われます。まちづくりをやるなかでいろんな人に出会うと、たぶん自分の性格なのだろうけど、やればやるほど変に熱くなってしまう面もある。使命感ではないけど、やっぱりこのまちで生きてるから、せっかくだからまちがよくなったらいいのになって思う。それに推進会議の2年間は短いようで長いから、やるなら自分たちが考えたことが市長や市の職員、市民に波紋のように伝播するくらいの熱を入れてやれたらいいなと思って今に至るかな。僕はね。

互いの引き出しを開ける

坂下●推進会議の活動で印象に残っていること、面白かったこと、難しかったことをお聞きしたいです。

杉原●私たちの地域行事グループはとっかかりを見つけるのがすごく

難しかったですね。わからないことだらけで、自分もどれだけ地域行事に参加してるかという、仕事もあって全然なんです。

吉見●バス公共交通と地域行事っていう大きなテーマだけがあって、「どうしていきましよう」というスタート。たとえば、最初に方向性が違う案が2、3用意されていれば、そのゴールに

向かって動いていけるけど、どこに向かっていくかを自分たちで考えるのはすごくたいへん。でも最初からゴールを決めると先入観にひっぱられていい意見やアイデアが出なくなる可能性もある。「自由にやっていいんですよ」といわれるほど難しいものってないけど、それにチャレンジしてきた感じがしている。だからテーマが難しかったというより、自分や人の、内面の引き出しを開ける難しさだったね。高島のバスの歴史を紐解いた1年目も新しい学びの時間だったと思う。

杉原●行ったり来たり、戻って戻っての1年目の会議があったからこそトンネルから抜けだせたと思う。

安原●グループで意見をまとめるのがすごく難しいのになって思いましたね。1年目の議論の中で、自分は地域の行事というと夏祭りとかイベントが頭にあるけど、年配の方にとっては、川の清掃とか自治会のゴミ

ミ掃除が大事な課題だと気づかされました。自分が関わっている青年会議会の活動はほんの一部で、地域行事はもっと深いもんなんだなと思ったり、すぐには答えがみつからないことが、逆に面白いことなんかと思ったりしました。

吉見●ぼくはもっと喧々諤諤に議論してるのかと思ってたけど、最初は思ってる以上に雰囲気がかたかった。最近になっていろいろな話もできるようになってきたけど、会議の前に、コミュニケーションを深めるための懇親会とか、ざっくばらんにおしゃべりできる場があれば違ってたかな。

藤井●当初は雰囲気がかたくて、しゃべっていいのかがわからなかった。

坂下●推進会議の事務局としては、まず、バスの現状について数字やデータを押さえたり、地域行事が抱えている課題を知っておかないと話をしてもらえないと考えてたんです。それぞれのテーマが重くて、課題も難しくて根が深いのですぐに行き詰まった感じでしたね。

藤井●自分はアイデアをいっぱい出したい人なので、最初はテーマのシリアスな面に気づかずに何か新しく楽しい面白いことやりたいと思っていたら、課題を振り返っている時間が思っていたより長くて。

吉見●楽しいイベントの企画だと思ってたのにぜんぜん違うなど。



(笑)

藤井●それに、みんなで話をするのは、一人で考えるのとは違って、一つ一つの言葉の意味をみんなで定義していかなきゃいけないということも勉強になりました。

坂下●参加者の年齢にも幅がありましたし。

杉原●人によっては親子ほどの年の差がある。私は、若い人が考えていることがわかってすごくいい勉強になったと思っているんです。それがこの2年間の一番の印象でした。職場の若い人とコミュニケーションをとるのにもすごく参考になった。

あのバス、人、乗ってへんかな

山田●私は、最初、バスには関心ないわと思ってたんですけど、考えていくとないこともない。昔から多趣味で、バックパッカーで自転車かついで日本中回ってたんですね。そのときに案外バスを使うんです。そんなことを考えるとバスがなくなったら困るぞと。高島みたいにバスの路線がこれだけあちこちにはりめぐらされている地域は珍しいのではないかなと。ぼくは市民というより趣味の視点から見る人が多いんですけど、高島にはいい山がいっぱいあって、それを一個ずつ登ろうとすると車でもいけるんですけど、バスはすごく大切なんです。8月に、せっかくだからバスに乗って山に行ってきたんですけど、自分で運転してると決まった道しか行かないから、バスに乗ると景色が新鮮でね。山に登る

とき、たまにはバスを使おうという話を連れの中でもしてるんです。無理からバスに関心をもつようにしたら、最近バスを見ると、人乗ってないかな、何人乗ってるのかが気になってきた。(笑)

全員●(笑)

山田●それに、自分が歳を取ったときのことや、親戚が高島町の鶴川にいますけど、お年寄りの方も多くて、バスが行かないようになっただけだとまずいなと思うようになりました。気づかなかったけどバスは大事だと感じるようになったんです。ただ、私は無関心な状態から推進会議に参加することで関心をもちえたけど、まったく関心のない市民の方にどう伝えるのかは今でも暗闇の中にいるんです。

王●私は会議の中で山田さんがおっしゃる「難しい」「わからへん」という言葉が印象に残っているんですけど、難しいことがわかったのが大事なことじゃないかと思ったんです。誰かが頑張れば解決すると思っていると一緒に知恵を絞ってくれないのだとしたら、難しいということをも市民に伝えることが必要なんじゃないかって。

坂下●答えが簡単に見つからないことを市民の立場から考えるのだから、難しく当たり前なんですね。

王●吉見さんは普段あまり使わないバスの課題にどんな思いで取り組んでいたんですか。

吉見●当たり前のように見えるバスからいろんなことが見えてくる。高島の未来やったり、高島の暮らしの満足度やったり、地域行事とのつながりやったり、ぼくはそういう視点で考えてしまう。青年会議所時代も「まちづくりってなんやねん」「自分たちに何ができるんだろう」というところから考え始めて、結局はまちに



関心をもってもらういうところに行き着いたのと似てる。バスの課題を話し合っているうちにバスに乗ってみようかなと思うのと一緒に、まちづくりを十年近くやってると面白く感じてくる。生きてるうちに、体が動くうちに、毎日じゃなくてもこのまちのために時間を割いて還元できるって気持ちになってくる。

王●かわり続けているうちに関心が芽生えてくる。

吉見●すぐにスイッチが入る自分みたいな人もいれば、火がつきにくい人もいるけどね。若いときにはみんなで熱くなってこのまちをよくしようと、無理にたきつけるみたいなことも必要なんじゃないかって思ってたけど、今は自分が何か動いて、そ



れを楽しそうだと思う人が増えていく方がいいと思っている。少しずつ関心をもってもらう、気がつけばみんなが熱くなるのいいな。

選べないつながりの豊かさ

杉原●地域行事の話をしていて思うのは、今、地域の中で暮らしてても、自分はこれでいい、隣の人がどうあってもいいというところが多くないですか。それがすごいさびしいなと思って。

吉見●人とのつきあい方が変わってきているのかな。「ええねん、俺一人で」っていう考え。

安原●地域っていうのがなくても生きていける時代という認識になってるかなとは思いますがね。ネットさえあれば、東京だろうが田舎だろうが仕事はできるから、田舎の方が家賃とかが安いから住みましたとか、今どきよく聞きます。そういうふう考える人が多いから、まちづくりや自治会もなくたっていいって思ったりするかなと思いますね。

山田●自治会でいうと、ぼくも元々は全然関心のない人間だったんですけど、子どもが生まれてから子ども会の役員になると、ここにこういう子どもがいてと知っていくと、よその子でもほっとけないので悪いことしていたら怒る。

安原●現実のつながりを大事にできる人がこれからすごく貴重になって、仕事でも重宝されていくだろうなとは思っています。まちづくり推進会議とか青年協議会の地域活動はしんどいことも多いですけど、将来的には自分の仕事に役に立つやろなという思いもどっかにあって続いています。

山田●SNSもいいと思うけど、今後は実体験っていうリアルなつながりがますます大事になってくるんじゃないかと思ってのんです。ただ、自分らが歳を取ったときにどうなってるんやろと不安には思いますね。そう思うと、市という単位でも、自分の住んでる周りでもいいですけど、外に目を向けるまちづくりっていうのは大事かなと思いますね。

王●生き方やライフスタイルが問題になっている気がします。たとえば、家庭や仕事のほかにもいろんなつながりを大事する生き方。

藤井●仕事とか家庭は深い付き合い。たとえば私の結婚式とかお葬式に来る人たちは、生まれた時からある関係とか自分で選んでいるすごく濃いつながりだと思うんです。でも、自分の生まれ育った環境を考えると、ご近所さんとか犬の散歩中にしか会わない人とかとのつながりも大事だったと思う。思い出したことがあって、私は小さい頃は引っ込み思案で体も小さくて、小学校の登下校の時間って辛いことが多かったんですけど、朝一人で歩いていると挨拶してくれるおじいちゃんがいるんです。2、3分立ち話をしたり、その家の朝顔が咲いたらその前で写真を撮ってくれたり。小学校の6年間、毎朝、私が通る時間に合わせて出てきて挨拶してくれた。学校に行くのがいやだなと思うこともあったけど、今日もおじいちゃんが待っていてくれるかもしれないから

行こう、私も元気に挨拶しようって思えました。その人の名前も知らなかったし、自分で選び取った濃いつながりではないけど、自分の生活をちょっと楽しくしてくれた一人だと思って。大学に受かったときに報告にいったらすごく喜んでくれて、子どもが生まれたあとも連れて行ったら喜んでくれました。

吉見●あるよね、そういう見えない細い糸みたいな。それが絡み合ってる気がする。

坂下●おじいちゃんにとっても大事な時間だったんでしょうね。

藤井●すごく濃いつながりだけど、自分とふるさとをつなげてくれている一つの線みたいなもの。推進会議で出会えた皆さんも、趣味とか思考が全然違う人たちですよ。お付き合いもまだ浅いけれど、細くても自分と高島市をつなげる一本一本の線なのかなと思います。

王●自分が意識的に選べないつながりも自分の暮らしを豊かにしてくれていることがすごく伝わりました。まちづくりの大事な一面という気がします。

高島に暮らす、高島をつくる

王●さて、最後に伺いますが皆さんにとって「まちづくり」とは何でしょう。



山田●私は昔、仕事は仕事、家は家、趣味は趣味って考えてたんですけど、今はぼくの中では全部一緒なんです。仕事やるならやる。遊ぶなら遊ぶ。けど、自治会の活動をやってきたことでお客さんが来てくれたりすると、全部渾然一体になってるなと思うんです。

吉見●切り分けられないね。まちづくりはライフワークとかそんなかっこいいもんでもなく日々の暮らしだと思う。それぞれに時間は振りわけてるけど、活動する場面、グラウンドは一緒。高島。

山田●ぼくは昔から人間関係も、趣味の友達とか職場の人をひっくるめて遊ぶのが好きだったんです。

坂下●いろんな人を混ぜ合わせる面白さですね。自分もいろんな面をもってるけど、自分につながっている人たちを混ぜることも面白い。

吉見●まちの話をするときにも、どうしても自分が知っている世界観や価値観でしかものが見えなかったりする。自分なら建設や音楽の目線、

山田さんなら山の目線から意見を出すと、いろんなカラーが出ていいんじゃないかなと思う。

王●お互いの視点を共有することでまちを考えるときの視野が広がるんですね。

吉見●高島の魅力について書かれている文章とか高島市の魅力について語る企画がありますよね。地場産品が紹介されることもあるけど、そこに住んでる人が一番の魅力じゃないのかと思いますよ。琵琶湖と田んぼの風景が高島らしい風景、田んぼを自然の風景と思いがちやけど人工構造物。このまちの魅力はこのまちの人たちでつくってきたものやと思う。性格も趣味も地元も違う人が高島にはいっぱいいる。人のカラーがいっぱいある。

坂下●こんな人いる、あんな人いるっていうのをたくさん知っている人の方がまちに魅力を感じてるんですね。

吉見●山を見て、あの尾根からの景色がいいよって言ってくれる山田さ

んがいるから、1回自分も登ってみたいなと思うし、もし一緒に行くなら安心感もある。田んぼとか森とか薪とか、違う魅力を語れる人がいる。人が高島の魅力を伝えていってくれるし、自分と高島の関係を存続させていくのではないかな。

杉原●本当に、まちづくりって「これや」みたいな一つの答えがないですよ。このまちに住んでる人は、それぞれに思いは違うかもしれないけど、大なり小なり、まちがよくなったらいいなという思いはあるんですね。

吉見●あらためて「まちづくりとは」って聞かない方がいいよね。そこに住んでたら絶対にかしらまちのことをやってるはずやから。まちをリアルにつくってると思う。

王●高島で暮らしていること、生きていることがまちづくりの一部。自然体な答えに目から鱗が落ちた気がします。

〈2021年1月24日、新旭深溝
wacca（わっか）にて〉



2年間をふりかえって



2年間をふりかえって

活動を振り返って

この2年間の会議で実感したのは、「まちづくり」というものに対し、多数の人の意見を集約し一つの方向性を打ち出すことの難しさでした。

会議を進める中でバス交通グループの委員さんや市役所職員の方々にグループでまとめた考えを披露する場が何度かありましたが、その度に新たな意見が飛び交い、自分たちの考えを再確認させられることが多くありました。それは人にとって、三者三様の「まちづくり」の形があるんだということだと思います。

そのありとあらゆる意見を纏めることが本当の「まちづくり」に繋がるのではと思っています。限られた人だけで行うより、多くの視点、多くの人がいればそれだけ可能性が広がります。これからも少しでも多くの方と「まちづくり」について意見を交わし、少しでも実現できるようにしたいと思います。

安原 翼(地域行事グループ)

まちづくり推進会議をふりかえって

この2年間、まちづくり推進会議のメンバーと、地域行事について、様々な角度から調べ、ディスカッションを繰り返す中で、単に高島市内の地域行事について知るだけでなく、それぞれの行事の存在意義や課題についても深く学ぶことができました。

印象に残っているのは、実際に地域行事へ参加してみたり、地域行事を運営されている団体の方も会議にご参加いただき、直接、様々なお話をお聞きできたことでした。

その上で、2年目はそれらの情報をどう伝えていくのか、メンバーとディスカッションやワーク等を通じて話し合いました。紆余曲折ありながらも、最終的に意見が一つにまとまり、成果物を生み出すことができたのも関わってくださった皆さまのおかげだと思います。事務局、市役所、研究者の皆様、そしてメンバーの皆様ありがとうございました。

奥澤 航一郎(地域行事グループ)

まちづくり推進会議の2年間をふりかえって

地元高島市に貢献したい想いで参加した委員会の2年間ではいろいろな経験をさせていただきました。コロナ禍の真ただ中であつたため、集まる機会、できることなど様々な制限がある中でしたが、メンバーにも恵まれ、一つの方向に向かって議論するのは有意義でした。

人との繋がりや地域行事という軸は今後のまちづくりにおいても重要であり、また若者、子育て世代にターゲットを絞った今回の提案も、地域がもっと元気になるきっかけになってほしいと願って出来上がったものでした。

この2年間で改めて高島市の課題や強みなどを知りましたが、今後もさらに現実を見据え、また同世代やあらゆる層を巻き込んで、よりよいまちづくりに関わっていきたいと考えています。

ご指導いただいた皆様、委員会のメンバー、ありがとうございました！

桑原 勇人(地域行事グループ)

2年間をふりかえって

2年間を振り返って

まちづくり推進会議に委員として参画させていただき、地域行事について改めて深く考える2年間でした。様々な地域課題の中、地域と人をつなぐ地域行事の仕掛けをどうしていくのか、出口の見えない壁にぶち当たりながら、今回提案する子育て世代の方へのアプローチ。人とのつながりを未来に繋げていくことが大切であり、その難しさも痛感しました。若者世代は、一度は自分の地域から離れてしまうこともあります。しかし、そこで途切れてしまうのではなく、その人達が大人になった時に、また、つながりを発信してくれることが「次世代への繋がり」に発展していくと思います。そのためには、子どもが地域の人との関わりを持ち、人との繋がり大切さを学ぶことで、その子達が大人になった時に発信者として地域を繋いでくれるはずです。私たちが提案するアイデアが根付いていくことを願っています。

杉原 清美（地域行事グループ）

2年間をふりかえって

地域行事の活動をとおして、僕はお祭りなどの運営側の大変さをたくさん学びました。グループのメンバーのみなさんの力を借りながらですが！

無事、地域行事の報告会を終えることができてよかったです。これからは、自分自身もう少し地域行事に目を向けて、できることがあれば協力したいと思いました。

白崎 蓮（地域行事グループ）

まちづくり推進会議の2年間をふりかえって

会議に応募したのは、高島市に来て半年、息子がおすわりを覚えた頃です。元々まちづくりに興味があったこと、経営を学び始めるタイミングだったこと、理由はいろいろあるけれど、一番は「産後は終わり。外に出たい！」という気持ちからでした。年齢も性別も、社会的な立場も違う人たちが話し合うというのは、簡単なことではありません。それぞれの文脈の中で語られる「まちづくり」や「地域行事」を定義し直すところからのスタートには、もどかしさも感じました。でも、親子ほども年の離れた人と、互いの肩書きを離れてフラットに話せる貴重な場。行きつ戻りつでも、対話を重ねてきたからこそ、気づけたことがたくさんあります。拙く、整理できないままの私の言葉に、皆さんが優しく耳を傾けてくださったおかげで、この報告書ができあがりました。本当にありがとうございました。

藤井 亜子（地域行事グループ）

2年間をふりかえって

まちづくり推進会議について

約2年間、高島市のバス交通に関するグループに参加して、バスの運営が様々な課題を抱えていることに気づきました。

高島市のバス交通の歴史を調べる作業の中で、いかに高島市が発展してきたかがよくわかり、その歴史にも興味が湧きました。

会議自体にはあまり参加できませんでしたが、これから少子高齢化が進む中でバスだけではなく、様々な課題が生まれてくると感じました。一人一人が問題意識と興味を持って取り組む必要があると思います。2年間、あまりお役には立てませんでしたが、大変勉強になりました。ありがとうございました。

池田 正明（バス交通グループ）

2年間をふりかえって

初めは存在すら知らなかったまちづくり推進会議。バスについて考えるといっても十数年もの間、乗っていない私に何が出来るのだろうか？出来ることが1つでもあるのだろうか？と考えながら結論が出ないままに参加させていただいた2年間でした。

なかなか出席も叶わない中での会議でしたが、それでも参加前よりはバスが身近な存在になったように感じます。走っているのかいないのか、利用者がいるのかいないのか、参加前は、全く興味はありませんでしたが、今ではすれ違うと見てしまう自分がいます。

会議の中で印象的だったのは「見える安心・見える福祉」というワードでした。大きな赤字を出しながらも存在する意味がはっきりと示されたワードだったと思います。

これで任期としては終了となりますが今後も高島市の将来について、意志をもって考えられる、動ける市民の1人として生活していきたいと思います。ありがとうございました。

栗田 紗希（バス交通グループ）

2年間をふりかえって

高島市のバス交通に関するグループに参加してみてバスの歴史、経過、そして現状と知っていくうえで抱える問題の多さに驚くばかりでした。

そもそも僕自身も個人的に市内でバスを利用したこともないというところからのスタートでした。利用者が少ないという事は知っていましたが、ここまでの赤字を抱えながらの運行だったと知ったときは衝撃でした。それでも回を重ねるごとに存在する意味もわかってきたように思います。

会議自体にはあまり参加できませんでしたが、参加前よりバスについて興味をもつこと、考えることができるようになった自分がいるのは確かです。

2年間ありがとうございました。

木津 陽介（バス交通グループ）

2年間をふりかえって

まちづくり推進会議への期待

今回、バスグループに参加した始まりは、バスの必要性を考え今の時代のニーズに適しているのか？障がい者の方にも優しいバス運営ができるのか？との思いからでした。

毎回の会議では、事務局・研究者の先生方の貴重な発言や提案には、常に学べる事ばかりでとても有意義な時間を過ごせました。

バスの歴史を探り、どのように運営されてきたのかを知り、現在の状況を委員で共有し、課題を出し合い、どう解決すれば未来につなげられるのかをテーマごとに組み立てられました。また、委員が発言しやすいよう研究者の先生方は、先ずは委員の意見を聞き、反論なく受け入れ、そこから上手く話題を整理され、会議のあり方も学べました。

今の時代の事だけを考えるのではなく、10年後の人口・生活スタイルに合わせて、バスのあり方を考える中で、高齢者の方が免許証返納し、買い物・通院などで移動手段が必要となる割合が増えていく。その時に、何があると便利なのかまで考えていく内容になりました。

高齢者の方に使いやすいシステムを考えていくと、障がい者にも配慮されたシステムもあわせて必要と考えられることが有難いと思いました。

この委員会でまとめられた内容を、どうすれば市民全体に共有していけるのか大きな課題があります。どの世代をターゲットに発信するのかによっても方法がかわるので時間はかかると思います。

時間はかかりますが、市民全体で考えることが、できるときがきた時、高齢者や障がい者に本当に優しい「まち」になっていると思います。

そんな「まち」なら、離れたくない！住みたい！と思える人が増えてくると思います。

大変な会議ではありますが、バスのテーマをきっかけに、優しいまちづくりになるよう期待が大きく膨らんでいます。

藤木 孝次（バス交通グループ）

これからのまちづくりについて思うこと

今回は「高島市のバス交通」というグループで、課題を考えるメンバーでしたが、このバス交通以外にも高島市が抱える問題は山ほどあります。

少子高齢化による限界集落の増加、災害時のネットワークづくりと避難所運営、各旧町村間での情報共有や連携、市の財政の限界、空き家問題、管理ができなくなった山林、杉が多い山林ゆえの土砂崩れ、獣害、移住・定住課題、移住者と地元民との壁、雇用の少なさ、待機児童…

僕自身が思う事は、この課題を「誰が解決するのか？」ではなく、「誰が知っているのか？」「どれだけの方が問題意識を感じているのか」だと思っています。

市の課題を行政だけが解決する時代はとうの昔に終わりました。これからは私たち市民と行政がお互いを理解しながら対話し、自分たちが立っているこの場所を想い、考え、解決していくことが重要であると思っています。

三上 和之（バス交通グループ）

2年間をふりかえって

まちづくり推進会議の2年間をふりかえって

私は「市内のバス交通のあり方」というテーマで2年間活動しましたが、「難しい」という思いを持ちながらの2年間でした。ただ最初に思った「難しい」と今思っている「難しい」は全然違って、最初はバスの事をあまりにも知らないし、よく考えたらそれほど関心がないという所に行き当たりました。バスのあり方を通じて、高島市の色んな問題も見えてきました。そして市民の多くはバスに関心がないであろうと思いますが、今はその方たちにどのように関心を持ってもらうかが「難しい」と感じています。でも、いろんなことを学んだので、これからも身近な人に伝えて行こうと思います。

2年間、関わっていただきましたみなさん、お世話になりました。またこのような機会をいただき、ありがとうございました。

山田 哲也（バス交通グループ）

これからのまちづくりに思うこと

私は民間企業経営者という立場から、2年間まちづくり推進会議に参加しました。活動を通して思うことは、行政運営『まちづくり』と企業運営では大きな違いがあるということでした。簡単に言えば、運営に問題があり機能を圧迫するものがある場合、そのものの事態を切り離したり改善したりしますが、そのままの形で置いておくことはまずありません。しかし、行政運営においては公共サービスという観点から人の暮らしの為に問題があり続けても生かされるものがあるということです。人の暮らしがある以上仕方がないのかもしれませんが、社会情勢や時代の変化に合わせた『たかしま』らしいまちづくりが必要だと思います。毎日の暮らしの中に見えているものでも、その問題が見えていない現状があるように、これからのまちづくりには、人々がまちへの関心を持ち合うことのできる豊かな未来の実現に向けた『改革』が求められているのだと思います。

吉見 大（バス交通グループ）



高島市まちづくり推進会議について

高島市まちづくり推進会議は、2015 年（平成 27 年）に市民と行政がそれぞれの立場の取組みを理解共有し、市民協働による持続可能な高島市を目指すため設置されました。

人口減少や少子高齢化が進行する中、生活者である市民が感じている地域課題の解決や、暮らし続けたいまちの姿、地域振興のための方策を市民・地域・行政が共に問題意識を持ち、検討しながら、市民協働によるまちづくりのあるべき姿を描き、実践していくことを目標としています。

第 1 期は 30 人の委員と行政職員が、高島市に関するウィッシュポエム（「夢」や「想い」）を作り、そこから 6 つのテーマを選定し、関心のあるテーマに分かれてグループ活動を行いました。各グループにはテーマに関係する部局の職員も参加し、行政や市民団体の取り組みを学び、現地での視察なども行いながら、課題を整理し、ウィッシュを実現するための提案をまとめました。

第 2 期から、事務局体制の充実を図り、滋賀県琵琶湖環境科学研究中心や他府県の大学、研究機関の研究者が参画しました。

第 2 期は、26 人の委員全員が 1 年目に高島市の現状や行政の取り組みを学び、その上で理想の高島市の将来社会像を描きました。2 年目には将来社会像に向けて調べたいテーマを整理し、関心のあるテーマで 5 つのグループを作りました。各グループには関係部局の職員が参加し、テーマに関するアンケート調査やヒアリングなどを行い、現状を把握した中から課題を整理し、市民、行政それぞれへの提案をまとめました。

第 3 期はこれまでとは異なり、募集段階から提示された行政の課題や第 2 期から引き継いだテーマについて、14 名が 2 グループに分かれ活動しました。

バス交通については、現状を把握するために都市政策課からバスの利用者数や収益や経費、過去に行われた利用者調査など詳細な情報提供を受け、現状を踏まえたうえで会議を進めました。

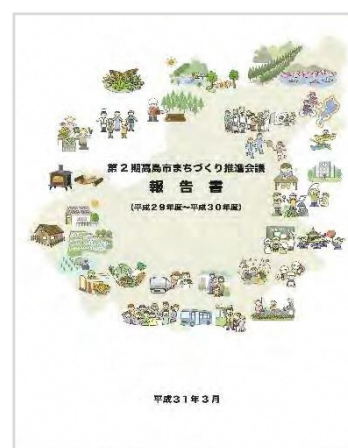
地域行事はテーマが幅広く、年代によっても関わりや課題の捉え方が異なるため、区・自治会など地域コミュニティで起こっている今日的な課題を共有した後、対話を重ねながらテーマを絞り、活動を進めました。

各グループの会議には、関係部局以外の行政職員が参画し、幅広い視野でお互いに意見を出し合うことができました。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、活動休止期間もありましたが、創意工夫しながら、提案をまとめることができました。

本会議の事務局では期間終了後も、委員、行政、関心をお持ちの市民とともに、提案の実現をめざしたいと考えています。本書をご覧ください、提案の実践にご関心をお持ちいただけましたら、ぜひ事務局へご連絡ください。



第 1 期の報告書
をご覧ください
ます→



第 2 期の報告書
をご覧ください
ます→



会議の記録

◆全体会議

	開催月日	内容	場所
第1回	2019年8月3日	進会議について／第2期作成の将来像について／哲学対話	新旭公民館
第2回	2020年2月29日	中間報告会（感染症拡大防止のため中止） ※一年目ふりかえりシートとグループ間のメッセージシートで意見交換を行った。	
第3回	2020年12月18日	各グループの提案と提案への意見交換	市役所
	2021年2月4日	第3回の意見を受けてグループ間で意見交換	市役所
座談会	2021年2月23日	第3期まちづくり推進会議をふりかえって	wacca(わっか)
第4回	2021年3月14日	成果報告	市役所

◆グループ会議

バス交通グループ

第1回	2019年8月31日	推進会議およびスケジュールについて 市内バスの基礎情報	新旭公民館
第2回	2019年9月21日	バスの課題と論点について	新旭公民館
第3回	2019年10月5日	論点、調べたいことの整理	新旭公民館
第4回	2019年10月25日	市総合計画、各町村史の調査	新旭公民館
第5回	2019年11月25日	市総合計画、各町村史の調査	市役所
第6回	2019年12月12日	バス交通年表整理	市役所
第7回	2020年1月16日	バスの歴史ふりかえり	市役所
第8回	2020年2月14日	全体会議発表内容整理	市役所
第9回	2020年6月25日	一年目ふりかえり、二年目スケジュール	市役所
第10回	2020年7月30日	10年後のバス交通のあり方を考える	市役所
第11回	2020年9月25日	なぜバスについて市民が議論する必要がある？	市役所
第12回	2020年10月15日	バスの現状、課題を市民に伝えるために	市役所
第13回	2020年10月26日	バスの現状を誰に伝え、どんな行動を起こしたい？	市役所
第14回	2020年11月13日	市民に伝えるバスの現状と課題の整理	市役所
第15回	2020年11月24日	市民に伝えるバスの現状と課題の整理	市役所
第16回	2020年12月4日	市民に伝えるバスの現状と課題まとめ	市役所
第17回	2020年12月14日	全体会議発表準備	市役所
第18回	2021年1月12日	市民に伝えるためのコンテンツを作る	市役所
	2021年1月24日	ゲーム体験会	wacca(わっか)
第19回	2021年1月26日	ゲームを通してバスの何を伝えたいか	市役所
第20回	2021年2月8日	報告書作成作業	市役所
第21回	2021年2月15日	報告書作成作業	市役所
第22回	2021年2月24日	報告書作成作業	市役所
第23回	2021年3月4日	報告書作成作業	市役所
第24回	2021年3月9日	報告会発表準備	市役所

会議の記録

◆グループ会議

地域行事グループ

開催月日	内容	場所
第1回 2019年8月29日	推進会議およびスケジュールについて 地域行事についての対話	安曇川公民館
第2回 2019年9月17日	知っている地域行事は？地域行事の分類	市役所
第3回 2019年10月3日	地域行事分類ふりかえり、気になる地域行事	市役所
第4回 2019年10月15日	課題の整理と活動について	市役所
第5回 2019年11月7日	お互いの参加動機を聞く	市役所
第6回 2019年11月28日	地域コミュニティに関する現状と課題	市役所
第7回 2019年12月19日	明らかにすること、調べたいことはなにか？	市役所
第8回 2020年1月23日	地域活動を巡る論点の整理と事例紹介	市役所
第9回 2020年2月6日	地域コミュニティの課題と論点について	市役所
第10回 2020年2月20日	全体会議発表準備	市役所
第11回 2020年6月26日	一年目ふりかえり、二年目の進め方	市役所
第12回 2020年7月4日	一年目ふりかえり、二年目の活動について	市役所
第13回 2020年7月7日	二年目の活動の目的整理	市役所
第14回 2020年7月21日	カレンダーとマニュアルづくりについて	市役所
第15回 2020年8月4日	課題と活動、疑問点の整理	市役所
第16回 2020年9月1日	活動への意見と会議の進め方について	市役所
第17回 2020年9月24日	カレンダーづくりワーク	市役所
第18回 2020年10月8日	カレンダーづくりワークのふりかえり	市役所
第19回 2020年10月27日	カレンダーづくりの課題整理	市役所
第20回 2020年12月3日	若い世代への情報発信とターゲット整理	市役所
第21回 2020年12月10日	子育て世代に伝えるコンテンツを考える	市役所
第22回 2020年12月22日	全体会議ふりかえり、グループの目標確認	市役所
第23回 2021年1月14日	子育て支援部局、団体との意見交換	市役所
第24回 2021年1月26日	子連れ応援マーク運用ルールなど	市役所
第25回 2021年2月9日	報告書作成・将来のねがいについて	市役所
第26回 2021年2月16日	報告書作成作業	市役所
第27回 2021年2月25日	報告書作成作業	市役所
第28回 2021年3月6日	報告書作成作業	市役所
第29回 2021年3月9日	報告会発表準備	市役所

第3期高島市まちづくり推進会議 参加者・関係者一覧(順不同・敬称略)

◆市民委員

バス交通グループ

山田 哲也
池田 正明
藤木 孝次
栗田 紗希
吉見 大
三上 和之
木津 陽介

地域行事グループ

白永 昇次
藤井 亜子
安原 翼
奥澤 航一郎
杉原 清美
白崎 蓮
桑原 勇人

◆研究者

木村 道徳（主任研究員 滋賀県琵琶湖環境
科学研究センター）
熊澤 輝一（准教授 総合地球環境学研究所）
王 智弘（非常勤講師 龍谷大学）
小野 聡（専任講師 千葉商科大学商経学部）

◆市民協働のまちづくり推進本部員(2019 年度)

上山 幸応（本部長 副市長）
西川 彰（副本部長 市民生活部長）
前川 一善（政策部次長）
藤森 泰男（総務部次長兼行財政改革推進局長）
饗庭 眞二（市民生活部次長兼新旭振興室長）
木下 晃（環境部次長）
西村 陽子（健康福祉部次長）
山本 功（子ども未来部次長）
長谷川 善一（農林水産部次長）
横井 康裕（商工観光部次長）
長瀬 正弘（都市整備部次長）
川原林 剛（教育委員会事務局教育総務部次長）
山本 純子（教育委員会事務局教育総務部次長）
曾根 孝司（マキノ支所長）
井上 昌司（今津支所長）
清水 勝徳（朽木支所長）
平井 秀明（安曇川支所長）
西澤 英一（高島支所長）

◆市民協働のまちづくり推進本部員(2020 年度)

中川 義人（本部長 副市長）
北村 英明（副本部長 市民生活部長）
長谷川 善一（政策部次長）
藤森 泰男（総務部次長兼行財政改革推進局長）
前川 一善（市民生活部次長兼新旭振興室長）
木下 晃（環境部次長）
山本 功（健康福祉部次長）
武内 美英子（健康福祉部次長）
枝 秀樹（子ども未来部次長）
青谷 守（農林水産部次長）
藤田 英治（商工観光部次長）
横井 康裕（都市整備部次長）
饗庭 眞二（教育委員会事務局教育総務部次長）
山本 純子（教育委員会事務局教育総務部次長）
川原林 剛（マキノ支所長）
井上 昌司（今津支所長）
清水 勝徳（朽木支所長）
平井 秀明（安曇川支所長）
西澤 英一（高島支所長）

第3期高島市まちづくり推進会議 報告書

2021年3月31日発行

発行 高島市

〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑 565 番地

TEL 0740-25-8000(代表)

FAX 0740-25-8101

<http://www.city.takashima.lg.jp/>

編集 たかしま市民協働交流センター

表紙デザイン 藤井亜子



お問い合わせ先

〈事業・本報告書に関して〉

高島市市民生活部市民協働課

〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑 565 番地

TEL 0740-25-8526(直通)

FAX 0740-25-8156(直通)

MAIL kyoudou@city.takashima.lg.jp

〈市民活動に関して〉

たかしま市民協働交流センター

〒520-1622 滋賀県高島市今津町中沼一丁目 4 番地 1

TEL 0740-20-5758

FAX 0740-20-5757

MAIL webmaster@tkkc.takashima-shiga.jp